慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『老子虞齋口義』伝本攷略
Sub Title	A Study of ROSHI KENSAI KOGI 老子虞齋口義 : Bibliographical Description
Author	山城, 喜憲(Yamashiro, Yoshiharu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2004
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.39 (2004.) ,p.1- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20040000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『老子鬳齋口義』伝本攷略

山城喜憲

序言

本稿は宋林希逸撰『三子口義』の内『老子鬳齋口義』の諸本とその現存伝本を、知見の限りにおいて本文の伝流系統を考慮し著録する調査報告である。列子、荘子を合わせ考察すべき面もあるが、取り敢えずは老子を対象として、荘列は後の課題とし総括を期したい。版種に就いてはほぼ網羅できたと考える。各版の伝本調査は博捜を旨としたのは勿論であるが、尚、日本国内所蔵に限っても遺漏は多く、中国、韓国等国外所蔵本の実地調査は果たしていない。以後追補を心掛けなければならない。

著者林希逸は、字は肅翁、竹渓また別に鬳齋と号し、福清（福建福清県）の出身である。端平二年（一二三五）進士に及第し、淳祐中（一二四一―五二）秘書正字、景定中（一二六〇―六四）司農少卿に歴任し、中書舎人で官途を断った中央官僚であるが、政治上の事績については史乗に見えるところは少ない。鬳齋集、易義、春秋傳等の著述があったことが知られており、三子口義の他に、考工記解二巻、鬳齋續集三十巻が今に伝わっている。また、師である陳藻の楽軒集八巻を編纂している。希逸は、林光朝（一一一四―七八）、陳藻の学統を引き、程朱の学を奉じた一面も窺える儒者であるが、道家を異端邪説に非ずとし、また、仏家の説をも兼修し、三子に対して禅学を斟酌した解釈を施している。三教調和の思想を抱いていたようである。

林希逸の事績、思想、その背景等の理解には荒木見吾「林希逸の立場」が裨益する。

『老子鬳齋口義』は本国よりも寧ろ日本において多く受容され弘通した。その経緯については、早く武内義雄「日本に於ける老莊學三　林希逸口義の渡来と流行」に言及されている。また、池田知久「日本における林希逸『莊子鬳齋口義』の受容」が『老子鬳齋口義』にも及んで参考になる。此の林希逸注本が、江戸初から前期にかけて、旧来の河上公章句本を凌いで普及していった事実は、本稿において羅列する如く現存伝本の調査結果を以てすればより明らかである。〔近世初〕書写の古写本が伝わり、慶長元和の間に古活字版四種五版が刊行され、寛永四年（一六一八）には、京都の安田安昌が〔元和〕刊古活字版の覆刻整版訓点本を刊行、同版は翌々寛永六年には覆刻重刊されている。更に、正保四年（一六四七）に林羅山の首書点本が京の林甚右衛門から刊行され、翌五年には早くも豊興堂中野小左衛門が覆刻本を出し、その後も首書を増補して明暦三年（一六五七）、延寶二年（一六七四）と京の上村次郎右衛門から重刊された。此の首書本の他に、寛文頃に即非如一の校点本も刊行されている。更に、林羅山の『諺解』にはじまる鬳齋口義に基づいた老子注釈書類が少なからず遺されていることも、当代における同書の流行を物語るものであろう。しかし、伝本調査に拠れば、江戸時代前期を下るとその盛行が漸く収束に向かう事実も明らかとなる。古活字版に始まり再三にわたった同書の刊行は延寶二年跋刊本を最後に重刊されることはなく、明治に至るまで蔵板印行者を転じて重印重修が繰り返されたに過ぎない。

以上、拙稿「天理大学附属天理図書館蔵『老子道徳經河上公解〔抄〕翻印並に解題（下）』及び「神宮文庫蔵『〔老子經抄〕』解題編」に於いて些か触れたところであるが、本稿をもとに、中国本国・韓国での受容実態と、舶載された明刊本・朝鮮刊本をも視野において、更めて考察する必要があろうと考えている。

・著録に当たり、諸版本写本の配列は本文系統を第一に考慮するものであるが、確認検証の困難な場合が多く、暫定的な措置を余儀なくされた。将来の本文考證を俟たなければならない。
・各版の所在伝本は早印から後印へと配列することを心掛けているが、全て直接比較することは難しく、また前後決しがたい場合が多い。結果として極大雑把な配列とならざるを得なかった。
・影印本は、底本に次接し書名事項を一字下げの「同」として標出する。
・印記印文中の□符は未読の文字を示す。
・参考引用する文献は原則としてその文献名のみを記し、他の目録事項の記載は省略する。尾に付す参考文献目録を参照されたい。

道德眞經口義

四卷　〔宋〕林希逸撰
〔明正統一〇（一四四五）〕刊（内府）　道藏洞神部玉訣類（彼一至四）所収

又

〔萬曆二六（一五九八）〕印（内府）

首に「發題」を冠す。その首行に「道德眞經口義（隔九格）彼一」、次行低三格に「發題」と題し、本文末字に直接し「鬳齋林希逸題」と署す。

本文巻頭「道德眞經口義卷之一」、次行低四格「鬳　齋　林　希　逸」、第三行低三格「道可道章第一」と題書。巻二以下は内題下に「彼二（―四）」と千字文順次数がある。尾題は巻頭題に同じ。

天地双辺、辺欄高さ二六・七糎、見開面幅二五・五糎、無界、毎見開面十行行十七字、林氏注は、各章経文末行に接し低一格大字単行行十六字。毎版の行数は二十五行。見開面中央即ち第五行と六行の行間に、毎版当たり一箇所の周期で千字文字号及び版木の順次数を「彼一（―四）（版次数）」の如く刻してある。その箇所は各版第五行六行、或いは第一五行一六行の間等と一定していない。

通行二巻八十一章本の各巻が二分されて四巻に仕立てられ、巻二は孔德之容章第二十一に、巻四は大國者下流章第六十一に始まる。

本書刊行年即ち『道蔵』の刊行年は洞神部玉訣類所収の『洞靈眞經』首等に見える御製牌記末の年記「正統十年十一月十一日」に従い、印行年は洞眞部方法類所収『靈寶無量度人上經大法』巻五十二・巻六十四・巻七十二、洞玄部方法類所収『靈寶玉鑑』巻四十三、洞神部玉訣類所収『道德眞經集解』巻四等の印造記「大明萬曆戊戌年七月吉日奉旨印造施行」に従う。但、現存する殆ど唯一の明印『道蔵』である宮内庁書陵部蔵本では以上の印造記の箇所は悉く後人の補写部分に当っているようである（『圖書寮典籍解題　漢籍篇』参照）。従って、補写の底本が萬曆印本であったとは言えても、当該道蔵経全体がそうだとは言えない。先ず、書陵部蔵本全貌の調査が必要であり、北京図書館等所蔵の清印本、各地に散在する道蔵零本との比較検証がなされなければならないが、当面は標記の如く処理して、後攷を俟ちたい。明正統十年刊道蔵の早印伝本の所在は知られておらず、刊行後の修・印の経緯についても不明な点が多い。道教研究にとっての基本資料であり、その影印本の利用は広く学界に普及している。所収経典本文の確実な理解のためにも、伝

本の博捜とより緻密な書誌調査の必要性が痛感される。

〈宮内庁書陵部蔵〉毛利高標旧蔵〔道藏經〕第一四四函所収

唐大四帖（四六一―一）

後補縹色表紙（三二・五×一二・九糎）、黄色地の書題簽（子持ち枠印刷）に「道德真經口義　彼一（一―四）一（一―四）」と題書。総裏打ち修補が施されている。版木一枚の印面幅に合わせ、毎紙五行分の別紙を貼り継いで一紙とし印刷。所々、特に下方部分に断版の痕跡が窺え、殊に、彼二第十一・十二板（道常無名章第三十一の末二行から將欲噏之章第三十六の八行まで、上海涵芬樓影印本の巻二第十三丁裏から第十五丁裏まで）の下方二字部分は他の箇所の断板を当て誤まって摺刷され、後にその部分に張り紙して墨で加筆訂正されている。その他にも印刷不良な箇所は朱或いは墨で補筆されている。又、彼四第十一・十二の両版、即ち勇於敢章第七十三第十七行から天之道章第七十七第二行まで（上海涵芬樓影印本巻四第十三丁裏から第十五丁裏まで）は欠失し、その部分は白紙を継いである。所々に朱の圏点、句点が施されている。

又

〔清道光二五（一八四五）〕修（内府）

〈北京図書館蔵〉北京白雲観旧蔵

未見。修印年は明李杰撰『道藏目録詳註』に冠する清道光二十五年清鄭永祥・孟至才同識「白雲観重修道藏記」の記載に拠る。

前掲宮内庁書陵部蔵本即ち〔明萬曆二十六〕年印本と次掲の本版影印本との比較の限りでは改版補刻の箇所を確認することはできない。しかし、上記萬曆印本の断版誤印の箇所は正しく印刷されており、彼四第十一・十二両版の欠失部分もこの方は欠けていない。此の両所については断版の補修、逸失した版木の補刻改版と考えるのが順当であろう。

陳國符撰『道藏源流考』は北京白雲観所蔵の道藏は一九五〇年北京図書館に移管された旨記し、『北京圖書館古籍善本書目』子部道家類に「道藏　明張宇初等編　明正統十年内府刻本　四千五百五十二冊」を著録する。尚、窪徳忠は一九四二年に白雲観を訪れ、その時に目睹した此の道藏についての紹介記事を遺している。『道教史　世界宗教史叢書9』三四九頁（第六章教団道教の固定化と民衆の信仰1教団道教の統制　『道藏』の編集）及び『道教入門』一四四頁（四道教の教学と内容1教学部門　白雲観所蔵の道藏）、また『窪徳忠著作集7　道教と仏教』

二八五頁（第二部一北京白雲觀の現況について4道藏）参照。

同

民国一三（一九二四）刊（上海　涵芬樓）影印北京白雲觀藏明正統十年刊清道光二十五年内府修本（道藏）第三八九冊（洞神部玉訣類彼上）所収　唐中一冊

茶色表紙（一九・九×一三・二糎）、外題「洞神部玉訣類　彼上（円圈で囲む）」と、子持ち枠で囲み直接印刷。扉表面に「道德真經口義卷之一　彼一（「彼一」二字墨囲陰刻、以下同様）」、「道德真經口義卷之二　彼二」、「道德真經口義卷之三　彼三」、「道德真經口義卷之四　彼四」とそれぞれを子持ち枠で囲み四列に並べて印刷。裏面に「中華民國十三年八月上海涵芬樓影印」と刊記がある。

天地双辺、辺欄高さ一一・一糎、無界、毎半葉十行行十七字、林氏注は、各章経文末行に接し低一格大字単行行十六字。版心は白口、左右の界線、魚尾無く、上下両端に小圈「〇」を配す。巻一は時に底本の千字文版次数が版心、或いは裏面第一〇行後の喉近くに有る場合がある。欄外上辺に沿って、版心を挟んで右から左へ横書きで、表面に「道德眞經口義」、裏面に「巻幾第幾」と書名巻数丁数を記す。

天地の双線、版心の円圈、欄上の書名巻数丁数は、影印に際して、体裁を整え繙閲の便宜を図っての新たな付増で、底本には本来無かったものと認められる。更に、底本文字の不鮮明箇所は適宜墨を加えて描潤された痕跡も窺われる。

又

後印（上海　涵芬樓）（道藏擧要）第二五冊所収　唐中一冊

茶色表紙（二〇・〇×一三・二糎）、外題「道德眞經口義」、子持ち枠で囲み直接印刷。扉表面は初印本に同じ。裏面の刊記は改められ双辺枠内に「上海涵芬樓影印正統道藏本」と記す。

明正統刊『道藏』の現存する伝本は『中國古籍善本書目』子部著録するところに拠れば、故宮博物院圖書館、上海圖書館、南陽市圖書館、及び四川省圖書館所蔵本が知られるが、何れも残欠本である。従って、各図書館所蔵本の内に本書が伝存しているか否か、各所目録の不備もあって明らかではない。又、韓国奎章閣に伝わる由であるが詳細は未詳。車柱環氏は「朝鮮王朝後期（十八世紀英祖時代）に入ってきたものと思われる」と記す（『朝鮮の道教』一道教思想序説第四章(4)道教の典籍80頁）。

老子鬳齋口義

二巻　宋林希逸撰
〔元〕刊（〔建安〕）

原本未見、『訂増中国訪書志』の著録に拠り、次掲影印本を以て少しく附贅する。

首に「老子鬳齋口義發題」（次行低七格に「鬳　齋　林　希逸」と題署）を冠す。

本文巻頭「老子鬳齋口義上」、次行低七格「鬳　齋　林　希逸」、第三行低三格「道可道章第一」と題し、尾題は巻頭内題に同じ。

左右双辺（一九・二×一二・五糎）、有界、十行行廿一字、希逸注は毎章経文後、尾に接して低一格大字単行行廿字。版心、小黒口双黒魚尾、中縫に「老子口義上（下）（丁付）」或いは「老上（下）」と題さる。上象鼻にまま字数がある。

同版式の〔元・建安〕刊『列子鬳斎口義』『莊子鬳齋口義』が伝存し、元来三子口義として合刻されたものの一つであろう。〈台北国立中央研究院歴史語言研究所蔵〉　唐大二冊

新補金砂子散し紺色表紙（二六・七×一六・〇糎）、茶色覆表紙を添える。金鑲玉装、原料紙縦二三・二糎。「虞山錢曾／遵王蔵書」、「忠孝／伝家」（白文）、「群碧／樓」の印記有り。錢曾、鄧邦述旧蔵、『羣碧樓善本書録』巻一宋刻本に著録。また、『也是園藏書目』巻五子部道家の「林希逸老子口義二巻」、『述古堂書目』巻二子の「老子林鬳斎口義二巻二本」は即ち此の本を指すか（『虞山錢遵王蔵書目録彙編』参照）。

本帙首冊副紙に次の鄧邦述の手書題記がある（『羣碧樓善本書録』に収載）。

此刻當是宋末本自宋嬋元自有此將／変未変字体入元後則失其勁挺之姿／矣三子口義明刊本亦不多見余得老莊二／種若沖虚至徳眞經未知能否続見耳／甲子二月　羣碧檢記「羣碧樓」（『羣碧樓善本書録』は「変字」間に「之」字あり）

『訪書志』は、『鐵琴銅劍樓藏書目録』巻十八子部六道家類・『同宋金元本書影』子部元本著録の列子鬳斎口義や、同院所蔵の莊子鬳斎口義と字様行格が同じであると指摘し、本版を鄧氏の宋刻説には従わず、瞿鏞著録の如く元刻と認めている。また、その莊子鬳斎口義の解題に「宋刊とされているが、瞿目・瞿影著録本と同版で、前掲の老子口義と対をなす元刊麻沙本である」と。今、此れに従う。

『北京圖書館古籍善本書目』子部道家類に、同書を著録し、「元刻本　二冊　十行二十一字　左右双辺」と記す、おそらくは同版本か。

また、『五十萬卷樓藏書目録初編』巻十四・『五十萬卷樓羣書

跋文』子二著録本も或いは同版か。広東東莞の莫伯驥（清光緒四年〈一八七八〉生、民国四十七年〈一九五八〉没）旧蔵。莫氏五十萬巻樓の蔵書は、一九三八年（民国二十七年）の日本軍の広東占領下に、市場露店に流出したと伝えられ、その後一部廻収された由でもあるが、その後の経緯については未考である。この本の所在も明らかでない。莫氏録するところに拠れば、同本は元刊本、明濮州李廷相、清北平孫承澤萬巻樓の旧蔵で、前に袁克文の題記一葉を附すと。

同

民国五四（一九六五）刊（台北　藝文印書館）影印〔元〕〔建安〕刊本　無求備齋老子集成初編所収　唐中一冊

外題に「宋刊林希逸老子鬳齋口義」（表紙に直接印刷）と、扉裏木記に「拠宋刊本景印」とあるが、底本は上記の中央研究院所蔵本であろう。但、鄧邦述の手書題記は影印されず、旧蔵者の印記は消去されている。

同

〔明前期〕刊

原本未見。『中国訪書志』第一編中華民国国立故宮博物院蔵楊氏観海堂善本解題著録。以下、同志に拠って記す。

首に「老子鬳斎口義發題」を冠す。

本文巻頭「老子鬳斎口義上」、次行低七格「鬳　齋　林希逸」、第三行低三格「道可道章第一」と題する。

左右双辺（二〇・四×一四・六糎）、有界十行行十八字、注低一格大字。版心白口（僅かながら線黒口を交える）、「老子口又上（下）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。〈台北国立故宮博物院蔵〉　楊氏觀海堂本　　唐特大二冊

後補縹色表紙（三一・五×二〇・〇糎）、裏打ち補修が加えられ、原料紙は縦三〇・五糎。室町期の朱点朱引墨訓点が付され、眉上に書入れあり。「釈氏／東沢」「杉垣簃／珍蔵記」（朱長方）の印記。江戸後期の医師山田椿庭（名は業広、文化五年〈一八〇八〉生、明治十四年〈一八八一〉没）旧蔵書。室町期以前に遡る日本への伝来本として注目される。

同

明嘉靖四（一五二五）跋刊（〔廣信府〕張士鎬）〔翻明正徳十三年賈詠銅活字〕印本　三子口義所収

首に「老子鬳齋口義發題」（次行低三格に「鬳　齋　林希逸」と題署）を冠す。

本文巻頭「老子鬳齋口義上」、次行低四格「鬳　齋　林希逸」、第三行低三格「道可道章第一」と題し、尾題は巻頭内題に同じ。但、書題下「上巻」、また「下」と署す。

左右双辺（一八・三×一二・八糎）、有界、毎半葉十行行十八字、希逸注は毎章経文後、尾に接して低一格大字単行行十七字。版心、白口単黒魚尾、中縫に「老子巻上（下）（丁付）」或いは「老上（下）」と題し、下象鼻にまま刻工名（老子部分は全て単字）がある。以下の如し。括弧内に巻次と葉次数を記す。尤（上1・2・4・12、下1・2）、士（上3・5～11・13・14、下3・4）、玉（上15・19・30）、王（上16～18・22～29・32・34～38、下6～8）、珏（上33）、人（下9～33）、立（下36・37）、中（下38・39）、一（下40・41）。

此の本は『列子鬳斎口義』『荘子鬳斎口義』と共に合刻された『三子口義』の一。「荘子」末に「三子口義跋」（正徳／戊寅〈十三年〉夏四月既望南京國子司業弋陽汪偉跋）及び「重刊三子口義後序」（嘉靖乙酉〈四年〉冬十月之吉貴溪江汝璧／書）があり、江序に「老列荘氏口義舊梓書林盖勝國時／本也而今弗傳吾郡侯西潭張公将以／所藏活字摹本謀復梓之謂其於文／章家有裨云爾（略）吾之梓是三子也亦／将盡夫作家之變以足於取材也（略）公／名士鎬字景周西潭其號也其剌吾／信也簡而文而其通變宜民之理於／是乎可觀矣（略）」と。即ち、本版の底本は張士鎬所蔵の活字本であった。

また、汪跋に「（略）林希逸著三子口義頗平實顯白／近已罕得／祭酒臨穎賈公藏善本偶諸生胡旻有活字印／因命摹之以代抄寫（略）賈公謂予盍題数語／以示摹印之意遂書所見於簡末云」とあり、此れは、底本に原有の刊書跋を収録したものと考えられる。「臨穎賈公」とは恐らく、弘治九年（一四九六）の進士、禮部尚書に至った賈詠（天順八年〈一四六四〉生、嘉靖二十六年〈一五四七〉没）であろう。賈氏が所蔵の善本を底本として胡旻所有の活字を用いて印行したものと解される。活字本三子口義の完本は知見に入らないが、北京図書館に「荘子鬳齋口義一〇巻釋音一巻一〇冊」が現存するようである。『北京圖書館古籍善本書目』の著録に拠れば「明正徳十三年賈詠銅活字印本〔巻一・二抄配〕」、釋音一巻は「明正徳十三年賈詠刻本」「十行十八字白口左右双辺」と。

刊行者張士鎬の仕歴について詳細は明らかに出来ないが、江序に拠ってその字号が知られ、「吾郡侯」と記すところから、本書刊行時、貴溪、即ち江西広信府知の任にあった人物である

ことが判明する。従って、刊地は広信府と推定される。次に掲出する萬歴二年序敬義堂刊本に冠する張四維の重刻三子口義序に「三子口義嘉靖初刻于信州郡守」とあるのは、即ち此の張士鎬刊本を指している。

張士鎬の刊行図書としては他に「明嘉靖五年刊集註太玄經六巻説玄一巻六冊」が知られる（『明代版刻総録』著録、北京図書館蔵）。

〈静嘉堂文庫蔵〉　陸氏十萬巻楼本　　唐大一冊

三子口義八冊（一三―一八）の第一冊。

後補淡茶色表紙（二五・三×一五・六糎）、外題無し。料紙、白棉紙。「邨／黄葉／莊」（朱長円、清呉之振カ）、「翼詵／堂章氏所／得之書」（朱方）、「歸安章／綬銜字／紫伯印」（白方）、「章／□」（白方）、「紫伯／秘翫」（朱方）、「苕上章／仔百流／覧所及」（朱方）、「歸安陸／樹聲蔵／書之記」（朱方）、「静嘉堂珍蔵」（朱長方）の印記あり。章綬銜（清後期の書画家・蔵書家、嘉慶九年〈一八〇四〉生、光緒元年〈一八七五〉没）翼詵堂・陸心源十萬巻楼遞蔵。

伝本は他に『國家圖書館善本書誌初稿』著録本（廣信知府張士鎬刊本三子口義八冊の内）、『北京圖書館古籍善本書目』著録本（一冊、張士鎬刻三子口義本）、『北京大学圖書館古籍善本書目』著録本（重刊三子口義一六冊の内）、『湖南省古籍善本書目』著録本（湖南師範大学図書館蔵、張士鎬刻三子口義所収本）があり、また、『中國古籍善本書目』に拠れば、上海図書館、河北大学図書館、吉林大学図書館、福建省図書館、及び南京図書館（清丁丙跋、『善本書室藏書志』巻二十二・『八千巻楼書目』巻十四著録本と思われる）の所蔵が知られ、いずれも三子口義所収本である。

同

二巻　宋林希逸撰　明張四維・陳以朝校
明萬暦二（一五七四）序刊（〔蒲州〕敬義堂）三子口義所収

首に「重刻三子口義序」（萬暦甲戌〈二年〉冬十一月朔旦蒲坂張四維序）を冠し、次に「老子鬳齋口義發題」（次行低一六格に「鬳齋林希逸」と題署）がある。

本文巻頭「老子鬳齋口義巻上」、第二行から第四行に四格を低して「宋寶謨閣直學士主管玉局觀鬳齋林希逸註／明吏部左侍郎兼翰林院學士鳳磐張四維校／（十二字墨釘）鳳隅陳以朝次」、第五行低二格に「道可道章第一」と章題を標す。尾題は巻頭内題に同じ。

四周単辺（二一・二×一四・一糎）、有界、毎半葉十行行廿二字、注低一格大字単行廿一字。版心白口単白魚尾、上象鼻に「老子口義」、中縫に「巻上（下）（丁付）」、下象鼻右寄りに「敬義堂刊」と刻さる。

三子口義の一。首の張四維撰「重刻三子口義序」に「宋竹溪林希逸所著三子口義嘉靖初刻于／信州郡守分寧陳大夫携一帙至蒲余得而／卒業焉則見所謂莊子義者最優（略）大夫謂是書世所希傳乃／命工梓之郡齋屬余為序（略）三義固／莊義為優然亦時小有出入或古今異文傳／録脱誤余皆存疑不論間有文義淆訛較然／明著則隨覧輒摽置簡端大夫謂可為林／註補也因并梓入之」とあって、校刊の経緯が概略窺える。前項に於いて触れた様に、本版は前掲の張士鎬刊本に拠る翻刻である。「分寧陳大夫」とは巻頭に題署されている「陳以朝」であろう。張四維撰『條麓堂集』巻二十三「送鳳隅陳使君入覲序」に「時守吾蒲分寧鳳隅陳使君蒞郡凡二載餘矣」との記述が見える。張四維の補注は莊子を対象とし、老子及び列子には新たな加注は見られない。

〈内閣文庫蔵〉　林羅山本　　唐大一冊（三一一―一九五）

三子口義零本。淡茶色表紙（二八・〇×一七・二糎）、「老子口義上下　完」と打ち付けに墨書さる。料紙は白棉紙。初印に近い早印本。稀に朱句点の書入れがある。「江雲渭樹」（朱長方、「江」「渭」二字白文）、「林氏／蔵書」（朱方）、「昌平坂／學問所」（墨長方）、「浅草文庫」（朱長方）の印記。林羅山旧蔵。

敬義堂刊三子口義完本の日本における伝本の所在は寡聞にして知らないが、列子鬳斎口義二巻二冊が同じ内閣文庫に林家本として伝存している。国外では台北市国家図書館、国立故宮博物院、北京大学図書館、中国科学院図書館、遼寧省図書館、湖南省図書館、暨南大学図書館等の所蔵が知られる。但、『國家圖書館善本書志初稿』に拠れば、版式は所掲の本と符合するが、本文巻頭第四行の墨釘（列子にも同様の墨釘が見られる）の所に「賜進士工部營繕司員外郎」の官職名十一字が刻されている由である。修或いは覆刻の関係にあると想定され、所掲本の出版事項記述の修正の必要も予想される。対査を要し、後考を俟ちたい。従って、北京大学図書館蔵本等諸伝本の帰趨も今のところ明らかでない。

敬義堂とは蒲州郡齋の刊行を請け負った刊行書肆なのか、関係は詳らかにしない。因みに、張四維の齋名は「敬義齋」である（條麓堂集巻二十四）。『明代版刻総録』は敬義堂の刊行図書として他に、精一堂等との合梓に拠る、遼釋道殿撰顯密圓通成

佛心要三巻明萬曆三年刊本二冊（北京図書館蔵）を載す。

同

二巻　宋林希逸撰　明張四維校　何汝成重校　明萬曆五（一五七七）序刊（四川　何汝成等）翻明萬曆二年序敬義堂刊本　三子口義所収

首に「重刻三子口義序」（萬曆甲戌冬十一月朔旦蒲坂張四維序）及び「重刻三子口義補敘」（萬曆五年蒲月朔日／賜進士第文林郎巡按四川監察御史侍／經筵前翰林院庶吉士蒲坂門人何汝成謹／序）を冠し、次に「老子鬳齋口義發題」（次行低一六格に「鬳齋林希逸」と題署）がある。

本文巻頭「老子鬳齋口義巻上」、第二第三行に四格を低して「宋寶謨閣直學士主管玉局觀鬳齋林希逸註／明内閣大學士禮部尚書鳳磐張四維補」、第四行低六格に「巡按四川監察御史前翰林院庶吉士後學何汝成校」、第五行低二格に「道可道章第一」と章題を標す。尾題は巻頭内題に同じ。

四周双辺（二一・二×一四・一糎）、有界、毎半葉十行行廿二字、注低一格大字単行廿一字。版心白口単白魚尾、上象鼻に「老子口義」、中縫に「○巻上（下）（丁付）」、下象鼻に稀に刻工名がある。次の如し。中（上24 28）、宗（下28 30 31）。

列子鬳斎口義二巻・莊子鬳齋口義一〇巻莊子釋音一巻と合刻されたもので、即ち三子口義の一。その末に正德戊寅夏四月既望南京國子司業弋陽汪偉の跋、及び嘉靖乙酉冬十月之吉貴溪江汝璧の重刊後序を附す。何汝成「重刻三子口義補敘」に「三子口義宋儒林希逸所著余師大學士張／先生復爲補註刻于蒲陽余誦而讀焉頃携／入蜀出示學憲陳君陳君亦先生門下士相／與校刻焉刻成謂余宜有敘（略）」と。即ち、張四維の門人である巡按四川監察御史何汝成が同門の学憲陳某と謀り、張氏補注校刊本、つまり前項掲出の本を、四川に於いて重ねて校刊したもので、前掲本と行格版式が相似し、覆刻に近い翻版である。

〈内閣文庫蔵〉　紅葉山文庫本　　唐大二冊

三子口義一六冊（子二三五―一〇）の内。

後補赤茶色空押亀甲繋ぎ表紙（二七・六×一七・二糎）、書題簽「三子口義　一（二）」。料紙、白棉紙。「秘閣／図書／之章」（朱方）の印記あり。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉　　唐大一冊

三子口義八冊（一二六―イ二五）の内。

未見。『天理図書館稀書目録　和漢書之部第四』著録。同目に拠れば、青色絹表紙（二九・七×一七・二糎）、題簽「三子口義　金　老子全」（双辺、金字は円内）。巻上第一三葉欠。「丙

辰年査過」「臣袁儒印」「愚齋審定善本」「愚齋圖書館藏」等の印記。

北京図書館（二部）、北京大学図書館（清永瑢校点）、吉林大学図書館、台北市国家図書館に三子口義「萬曆五年何汝成刻本」を所蔵する由。同版本であろう。

老子

二巻　宋林希逸注　明施觀民校
明萬曆二（一五七四）序刊（校者）　虞齋
三子口義所収

首に「刻三子口義序」（行体写刻、末題「萬曆二載臈月望日閩甌寧趙秉忠／書于姑蘇舟中」）及び「老子口義發題」（次行低八格「虞　齋　林　希逸」と題署）を冠す。

本文巻頭「老子巻二」、第二・三行低九格に「宋福清　虞齋林希逸　註／明同邑　後學　施觀民　校」、第四行低二格に「道可道章第一」と章題あり。尾題は「老子巻一（二）終」。

左右双辺（一九・二×一二・九糎）、有界、毎半葉十行廿二字、注低一格小字双行廿一字。版心、白口単黒魚尾、或いは白魚尾、上象鼻に「虞齋老子口義」、中縫に「巻幾（丁付）」、下象鼻に次の如く刻工名がある（算用数字は丁次）。曹祜（発題12）、何銓（一17813 16、二18）、邵埴（一2 14 15、二17）、何庸（一34、二78）、何序（一56、二34）、何釗（一9 10、二19 20）、何經（一11 12、二11 12）、何器（一17 18、二21 22）、張本（一19、二56）、何貞（一20）、王約（二1 2 13 14）、王成（二9 10）、兪廷（二15 16）、何道（二23）。

莊子一〇巻音釋一巻列子八巻と三子口義として合刻され、その第一に置かれる。趙秉忠「刻三子口義序」に「（略）余自少時喜讀三子／書顧其語芟衍其辟指旁以淵艱于鬯／白家大人則亟語余林虞齋先生口義時々／與誦一兩章輒恍寤神契晒其全書燬／没鮮傳布者歲甲戌謁告歸過晉陵／同年施龍岡刺史持觴々余于舟因相／上下古文章家則紙掌譚三子者已出／所刻口義晬余且命之序（略）」と。「龍岡」とは校刊者觀民の字又は号であろう。

〈京都大学附属図書館蔵〉　唐大一冊

虞齋三子口義八冊（一―六七　サ一）の内。

後補黄色表紙（二四・六×一六・一糎）、外題無し。料紙は白棉紙。稀に朱句点の書入れがある。大正六年三月三十一日受入印、及び「京都／帝国大学／図書之印」（朱方）の印記がある。

同

〔明〕刊（東山書林）　覆明萬曆二年序刊本
虞齋三子口義所収

首序、巻頭題書体式、版式並びに前掲書に同じ。

左右双辺（一九・一×一二・九糎）、下象鼻に次の刻工名がある。東山梓段刊（序2 3）、東山梓段鋭（一1）、東山梓段秋軒（一2）、何銓（一7 8）、東山梓／段文（一13 14）、東山棟（一15）、東山梓（一16―18、二1 2）、東山梓舒暁窓（一19 20）、東山梓行／周日新刊（二17 18）。前掲書と「何銓（一7 8）」だけは一致する。両本覆刻の関係にあり、前後を鑑別するには精緻な対比調査を要するが、撫刻の粗さが感じられ、この方を後出と看做したい。また、荘子巻四第三五丁の下象鼻には「東山書林」と刻され、同書房による覆刊と認められよう。

〈静嘉堂文庫蔵〉　陸氏守先閣本　　唐大一冊

三子鬳齋口義（同文庫目録題）一〇冊（二九―二四）の内。淡茶色表紙（二八・四×一七・三糎）、外題無し。但、荘子、列子に、青色地の元題簽四片が剥離して遺存し、「鬳齋荘子口義」（五）」「鬳齋列子口義中（下）」と題す。「歸安陸氏守先閣書籍禀請／奏定立案歸公不得盗賣盗買」（朱長方）、「静嘉堂蔵書」（朱長方）の印記あり。陸心源守先閣旧蔵。

〈東京大学東洋文化研究所蔵〉東方文化学院旧蔵書　唐大二冊

三子口義（同所目録題）一六冊（子部―道家―七）の内。後補淡茶色表紙（二四・五×一五・八糎）、外題無し。襯紙を挟める改装本。副葉子各冊前二丁、後一丁。朱の句点・圏点・声点・朱引、天地行間に朱筆で校異・校字・直音注記の書入れがある。下巻末行下方に朱細筆で「乙亥七月廿六日」と識さる。「江左／庾氏／家蔵」（朱方）、「柳研齋／藏書」（白方）、「澈心／握玩」（朱方）、「樂山／眞賞」（朱方）、「投戈／講藝／息馬／論道」（白方）、「青田／徐則／恂蔵」（白方）、「東方文化／學院東京／研究所／圖書之印」（朱方）の印記。徐則恂（清光緒五年〈一八七九〉生、没年不詳、浙江処州青田県人、清末の諸生、民国時浙江内河水上警察庁庁長）東海蔵書楼旧蔵書。

その他、『北京圖書館古籍善本書目』に明萬暦二年施觀民刻本二部（八冊、十四冊）が著録され、『中国古籍善本書目』に拠れば首都図書館、中国科学院図書館、上海図書館、華東師範大学図書館、延辺大学図書館、浙江図書館の所蔵が知られるが、上記何れの版に当たるのかは明らかでない。

老子鬳齋口義

二巻　宋林希逸撰
明萬暦四（一五七六）刊（陳氏積善書堂）
三子口義所収

未見。『中国古籍善本書目』の著録に拠る。同目は鄭州大学図書館及び廣西壮族自治区桂林図書館所蔵の両伝本を録す。他

に所在を聞かず、詳細は未詳。其の三子口義は四二巻、老子鬳齋口義二巻、莊子鬳齋口義三二巻、列子鬳齋口義八巻よりなる。

以上、『三子口義』が明萬暦初年頃に集中して再三に亙って刊行された事実は、同書伝流史上特徴的な事象として注目に値しよう。当時相当広く流布したものと想われ、林希逸注説の流行が窺われる。学術、思想面から何らかの思潮としての要因が考えられるのではなかろうか。

道德眞經　二巻　宋林希逸注　明程兆莘校　明萬暦一四（一五八六）刊（商陽程氏）

未見。『國家圖書館善本書志初稿』著録。他に伝本の所在を聞かず、以下、同志に拠る。

首に萬暦丙戌程涓刻序、林希逸序を冠し、次に篇目がある。本文巻頭「道德眞經上篇」、次二行低七格に「宋鬳齋林希逸註／明商陽程兆莘重校」と題す。四周単辺（一八・八×一三・〇糎）、毎半葉八行行十八字、注低一格小字双行行十七字。版心題「道德經巻上（下）（丁付）」、林希逸序の版心下方に「鉛」の刻工名がある。上、下二篇、八十一章に分けられ、各章首句を章名とし、「道可道第一」「信言不美第八十一」の如く題さる。

〈台北市国家図書館蔵〉　一冊

「德壽／印信」（朱方）、「國立中央圖／書館収蔵」（朱長方）の印記。

老子鬳齋口義　二巻　宋林希逸撰　〔朝鮮世宗四（一四二二）〕刊（集賢殿）銅活字（庚子字）本

未見。『山氣文庫目録』の著録に拠る。

四周双辺、半郭二三・四×一五・三糎、有界、半葉十一行廿一字、注双行、大黒口。

「永樂二十年（一四二二）冬十月甲午正憲大夫議政府參贊集賢殿大提學知經筵同知春秋館事……臣卞季良拜手稽首敬跋」の跋文がある。

現存伝本の内では〔元〕刊本に次いで〔明前期〕刊本と並ぶ早出の刊本であり、著録に誤認が無ければ、朝鮮に於ける同書受容年代の上限を劃する伝本として注目される。山氣文庫蔵本、大邱市金炳九氏個人所蔵本の存在を仄聞するが、他に同版本の所在は知られていない。後述するように、本庚子字銅活字印本を底本として、成宗五年（一四七四）、原州において江原道觀察使李封によって覆刻刊行されている。

〈李謙魯山氣文庫蔵〉　韓特大一冊（三―一六五）

線装、大きさ三一・八×一八・三糎。題簽「道德經」。巻一、一～六張は下部破損。初張落丁。料紙は稿精紙。印記「鐵城李氏」「子益」と。

〈大邱金炳九氏蔵〉　一冊

崔在穆氏の報告「林希逸『三子鬳齋口義』の韓國版本調査」（於東方学会第四十八回国際東方学者会議シンポジウムⅢ）の附記に拠る。二〇〇〇年十一月慶北大博物館で特別展示された由。「四周双辺、十一行二十一字、注双行、上下黒口、上下内向黒魚尾」と。「一巻一冊」と記され、上下何れが存巻なのか明らかでない。

尚、庚子字銅活字本『莊子鬳齋口義』の零本数冊が現存している。韓國國立中央圖書館蔵一冊（存巻六、『國立中央圖書館古書目録3』著録）、同一山文庫の一冊（存巻八、『國立中央圖書館古書目録3』・『國立中央圖書館善本解題Ⅰ』著録）、趙炳舜氏誠庵文庫蔵一冊（存巻七・八、『誠庵文庫目録』著録）、同蔵一冊（存巻九―一〇、同上）及び李謙魯山氣文庫蔵の一冊（存巻九―一〇、『山氣文庫目録』著録）で、崔氏はその他高麗大學校華山文庫蔵の三冊（存巻九・一〇・莊子十論）を挙げている。各本書目の著録するところに拠れば、十一行二十一字四周双辺　注双行、上下黒口　上下内向黒魚尾の版式であり、『老子鬳齋口義』と類同である。刊年は『山氣文庫目録』は朝鮮世宗四年（一四二二）刊、『誠庵文庫目録』は世宗七年（一四二五）刊、『國立中央圖書館古書目録3』は世宗年間刊とする。『山氣文庫目録』及び『誠庵文庫目録』に拠れば「永樂二十（一四二二）年冬十月甲午正憲大夫議政府參贊集賢殿大提學知經筵同知春秋館事兼成均館大司成臣卞季良拜手稽首敬跋」の鋳字跋があり、此れも老子の場合と同様である。此の様に老・莊鬳齋口義に庚子字本が実在することに由って、今日未だ確認されていないが、『列子鬳齋口義』の庚子字銅活字本が刊行された事実は殆ど疑いを入れないであろう。後述するように覆庚子字本と看做される『列子鬳齋口義』伝本の存在がその有力な徴証となる。そして、刊年を確定することは難しいが、世宗朝前期のほぼ同じ時期に三書揃って『三子口義』として刊行されたものと推量されよう。

同

二巻　宋林希逸撰
朝鮮旧刊

未見。『中国訪書志』「国立故宮博物院蔵楊氏観海堂善本解題」に拠る。

首に林希逸の「発題」を冠し、本文巻頭は「老子鬳齋口義上／（低十一格）鬳　齋　林　　希逸」と題す。

双辺（二一・六×一四・八糎）、有界、毎半葉十一行行廿一字、注小字双行。版心細黒口「老子上（下）（丁付）」。版式稚拙で、所々墨釘がある、と。

〈台北国立故宮博物院蔵〉　楊守敬観海堂旧蔵　　韓大一冊

後補黒色表紙（二八・二×一七・三糎）。『中国訪書志』は『経籍訪古志』巻五、『留真譜二編』著録の容安書院蔵朝鮮国刊本と同版らしいが、蔵書印が違うから別蔵本であろう、と。『経籍訪古志』巻五著録本の解題に拠れば、「巻首墨書圭瑞叟三字、又有□化柳健天行印及養庵印」と。該本の現所在は未詳。

本版は、李仁栄『清芬室書目』巻三著録の同書二部各一冊（現所在は不詳）と同版かと想われる。同著録本の一は、「老子鬳齋口義　二巻　附陰符経　一巻（筆写冊）　一冊」で、李氏解題に拠れば、「首載口義發題。巻端題老子鬳齋口義上、鬳齋林希逸、道可道章第一。成宗五年甲午原州刊、覆庚子字活字刊本。木版。四周雙邊、有界十一行二十一字、注雙行、匡郭長二三・〇糎、廣一六・〇糎、黒口。巻下末有成化十年甲午徐居正新刊老列二書跋。附陰符経、筆写冊。首有龍喜神△・鄭佸慶會・東萊世家・坡平尹舜擧魯直章・居士記等印記。尾有坡平尹舜擧魯直章・龍喜神△印記。按隆慶乙亥字本攷事撮要原州蔵此書冊板。又按、經籍訪古志巻五掲載此書」と。又一は、「老子鬳齋口義　二巻　一冊」、版種、版式の記述は同前、「尾有成化十年甲午江原道觀察使李封跋」と。成宗五年は明成化十年（一四七四）に相当し、李氏引く所に拠れば、前者の徐居正「新刊老列二書跋」中に「（略）今江原監司李侯封、文章世家、其學本於孔孟程朱之道、而亦能出入諸子、馳騁縦横、折衷以性命義理之正、此老列二書、所以重繍于梓也」と、刊行者李封への言及があり、徐・李両跋は密に関連する。陰符経一巻を除き両冊は同版であろう。又、徐跋によって「老子鬳齋口義」と同時に「列子鬳齋口義」が刊行されたとの推測を可能とする。

『清芬室書目』は「列子鬳齋口義　二巻　一冊」を著録し、「宋林希逸撰。前後数葉落。成宗五年甲午原州刊、覆庚子字活字刊本、木版。四周雙邊、有界十一行二十一字、注雙行、匡郭長二三・五糎、廣一五・五糎、黒口。按隆慶乙亥字本攷事撮要原州冊板有此書」と。此れは、崔在穆氏が指摘するように『奎章閣圖書韓國本總合目録』（稿者未見）著録の「庚子字覆刻本、二巻二冊、四周双辺、半匡二一・五×一四・八糎、注双行、上

下大黒口、上下内向黒魚尾」と同版なのではなかろうか。氏は更に、啓明大学校『古書目録』（稿者未見）著録の二巻二冊も、庚子字覆刻本と看做している。記述された版式の相似から同版である可能性は高い。また、延世大学校中央図書館にも覆庚子字本二巻一冊を蔵している（『〔延世大学校中央図書館〕古書目録』著録）。「十一行二十一字」の行字数は、同時に刊行された老子と共通していたと考えられよう。掲出の「朝鮮旧刊本」とも符合する。

尚、未だ実見する機会を得ないが、諸書目記載するところによれば、韓国には『莊子鬳齋口義』の覆庚子字刻本も伝存している。韓国国立中央図書館蔵二冊（存巻四―七、八―一〇、『國立中央圖書館善本解題Ⅰ』著録）、同蔵一山文庫の二冊（存巻一―三、八―一〇、『國立中央圖書館善本解題Ⅰ』・『國立中央圖書館古書目録3』著録）、高麗大学校晩松文庫の一冊（存巻八―一〇、『晩松金完燮文庫目録』著録）、精神文化研究院蔵一冊（首二冊欠、『蔵書目録　古書篇Ⅰ』著録）、趙炳舜氏誠庵文庫蔵一冊（存巻一・二、『誠庵文庫目録』著録）と何れも残欠零本ではあるが、覆庚子字本とされている。また、高麗大学校薪菴文庫の一冊（存巻三・四、『薪菴文庫漢籍目録』著録）も同版かと想われる（但、「版心上下白口」とあるのは不審である）。各蔵書目の著録するところを総合すれば、四周双辺、十一行二十一字、上下黒口、上下内向黒魚尾の版式である。又、現所在は不詳であるが、『清芬室書目』巻三著録の「莊子鬳齋口義零本（存巻九・一〇）新添莊子十論　一巻　一冊」、「莊子鬳齋口義零本（存巻四―七）　一冊」も同版であろう。前者に就き李仁栄解題は「成宗五年甲午慶州刊、覆庚子字活字刊本、木版。四周雙邊、有界十一行二十一字、注雙行、匡郭長二二・〇糎乃至二三・五糎、廣一五・五糎、黒口、巻十末有景定改元和中節宣教郎知邵武軍建寧縣林經德序、及景定辛酉十一月己巳三衢徐霖景説跋、十論末有莊子音釋、次成化甲午七月日中直大夫咸陽郡守金宗直跋、次兼觀察使嘉善大夫同知中樞府事金永濡、兼都事禦侮将軍行忠佐衛副司直李世佐、及分刊各官守令等列銜」と、また、李氏引載する金宗直（一四三一年〈世宗十三〉―一四九二年〈成宗二十三〉）の跋に「昔在世宗朝、使于上国者、苟得箋傳之新奇者以来、盡用銅字印之。歳在甲午、方伯金公永濡之到也、偶得一本、分刊各邑、鳩集于慶州府」とあり、刊行の経緯が窺える。分刊官名列銜は、高麗大学校晩松文庫の一冊（存巻八―一〇）にも有るようである。

覆庚子字銅活字刊本も李仁栄『清芬室書目』記すところに信を置くならば、明成化十年（一四七四）即ち成宗五年の同時期に、原州に於いて江原道觀察使李封の主導により『老子虞齋口義』『列子虞齋口義』の両書が、慶州に於いて慶尚道觀察使金永濡等により『莊子虞齋口義』が刊行されたと推量される。

掲出の楊守敬旧蔵「朝鮮旧刊本」は比較考証に資する同類本の所在を聞かず、上述の如く覆庚子字本も『清芬室書目』著録二本を含め伝本の所在は知られていない。従って、推断は慎むべきであるが、但、行字数の一致、版式の類似（匡郭寸法の差異は、採寸位置の相違に因るか、李氏は外郭を測定したとも考えられる）を考慮するならば、覆庚子字活字刊本である可能性を否定は出来ないであろう。もしそうであるならば、該本の刊行事項標記は、「朝鮮明成化一〇〈成宗五〉（一四七四）跋刊（原州　江原道觀察使李封）〔覆世宗朝〕刊庚子字印本」という事になろう。但、補刻、覆刻の関係も想定され、今は、該本及び如上の関連伝本未見の故、『中国訪書志』の著録に従う。

尚、本項の叙述は、嶺南大学哲学科教授崔在穆氏「林希逸『三子虞齋口義』の韓國版本調査」（科研費「古典学の再構築」講演会レジュメ）の学恩に得るところ多大である。

同　〔朝鮮宣祖朝〕刊

首に「老子虞齋口義發題」を冠す。

本文巻頭は「老子虞齋口義上」、次行低九格「虞　齋　林希逸」、第三行低三格「道可道章第一」と題す。尾題は首題に同じ。只、下巻尾題は「下」字下隔一格に「終」字を添える。

四周単辺（二五・七×一三・八糎）、無界、毎半葉十二行行十八字、注改行低一格大字単行行十七字。版心粗黒口双花魚尾、或いは双黒魚尾「老子上（下）　（丁付）」。

最終葉裏に跋文五行があり、「隆慶四年庚午孟秋／下澣紫洞頤齋車軾／敬叔為高杆城光晏／先生書于蓬萊郡之／海山亭」と。明隆慶四年（一五七〇）は宣祖三年に当たるが、内容から鑑みれば、刊語跋ではなく寧ろ書写識語であろう。従ってこの年記を刊年とは見做し難い。所掲の天理図書館蔵本について『天理図書館稀書目録　和漢書之部第四』は「李朝中期刊」と著録する。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉韓特大一冊（一二六・一―イ5）

後補茶褐色表紙（三三・〇×二三・〇糎）、題簽剥落し、その痕に金泥筆で「老子虞齋口義　隆慶四年庚午」と題書。また、

見返し右端に「享保十七壬子暦首夏天地不仁章以下出席于時初看是書」と朱筆の識語を有す。首六十五章に朱句点、二十三章までには朱圏点朱引の書入れ、また、眉上行間等に朱で「一本」との校異、墨筆で「李卓吾」「朱晦菴」「筆乗」「翼注」「金氏」等諸家の注説を引抄せる書入れがある。「島田翰／讀書記」（白長方）、「四通(?)／研(?)齋」（朱方）、「竹添／鴻章」（白方）、「井々居士／珍賞子／孫永保」（朱長方）、「大正十／二年所／得古槧」（朱方）、「三井家聴氷閣」（朱長方）、「好古／□□／□□」（白方）、「聴／氷」（朱方）、「聴氷壬／戌以後／所集旧／斬古鈔」（朱方）、「□□／曰□」（朱方）、「雙籠監蔵」（朱長方）の印記あり。島田翰・竹添井々・三井家遞蔵本。『天理図書館稀書目録　和漢書之部第四』著録。

『経籍訪古志』巻五著録の容安書院蔵朝鮮國大字刊本とは同版のようであるが、解題には「巻首有高平隆長印及喜字圓印」とあり蔵書印が相違し、別蔵本であろう。該本の現所在は未詳。

他に伝本は知られていない。但、延世大学校蔵「老子鬳齋口義写本二巻一冊（『古書目録』著録）の巻末に「隆慶四年庚午孟秋下澣紫洞頤齋車軾敬叔為高杆城光晏先生書于蓬萊郡之海山亭」と本版と同文の跋語が有るとされ、また、現在所在は明らかではないが、『清芬室書目』巻三著録の古写本一冊にも同じ跋文が存し「四周雙邊、有界十二行十八字、匡郭長二三・五糎廣十九・五糎、尾有跋、隆慶四年庚午孟秋下澣紫洞頤齋車軾敬叔為高杆城光晏先生書于蓬萊郡之海山亭云、首有金城世家、尾東隠印記、經籍訪古志巻五載此書版本」と。両写本の関係、両写本が本版の転写であるのか、刊行に先行する原写本或いは伝写本であるのか系統関係は不詳。

「老子鬳齋口義」の朝鮮旧刊本として、他に韓国精神文化研究院所蔵の乙亥字本二冊が知られるが、未見。『蔵書目録　古書篇一』に拠れば、〔仁祖朝以前〕刊　四周双辺　半郭二六・七×一五・九糎　九行二〇字　上下三葉花紋魚尾、「坡平世家尹會仲之印」の印記がある、と。同目にはまた、年紀未詳の筆写本一冊（附黄石公素書）を著録する。共に後攷を竢ちたい。

同

〔近世初〕写

〈京都府立総合資料館蔵〉　和特大一冊（特一七二―二五）

後補薄茶色覆表紙（三二・七×二四・三糎）、「老子鬳齋口義」と打ち付けに墨書。元は、薄縹色藍草漉込表紙、無題、一部破

損し、後表紙は欠落。料紙は厚手の楮紙。

首に「老子鬳齋口義發題」（次行低十二格に「鬳齋　林希逸」と題署）を冠す。

本文巻頭「老子鬳齋口義上」、次行低十二格「鬳齋　林希逸」、第三行低二格「道可道章第一」と題し、尾題は巻頭内題に同じ。

無辺無界、字面高さ二八・五糎、毎半葉十四行行廿一字、林注は毎章経文後改行低一格大字単行行廿字。柱題書無し。

大型本で厚手の料紙であることから或いは朝鮮装かと疑われるが、江戸初期頃の邦人の筆致と推量した。書写の様態に鑑みるに底本の程式にある程度忠実に転写されているようである。行二十一字の歎式は〔元〕刊本、朝鮮世宗四年刊庚子字本、朝鮮旧刊本にみられるが、朝鮮両版は林希逸注を経文下直ちに小字双行で配してあり、経文後に接して改行低一格大字単行で書写されている本書は〔元〕刊本に似る。〔元〕刊本系統の伝写本と考えられよう。所々元の写字を切取り、裏から紙を貼り充てて訂正した箇所が目に着く。また、まれに右傍に見消ちゞ符が付され、字間に小円圏を加え旁に脱字を細書、並びに本文と一手であろう。「京都／府図／書館」（朱方）の印記。

同

（内題「老子鬳齋（ママ）口義」）存巻下（欠江海爲百谷王章第六十六以下）　闕名者点

〔近世初〕写

和大一冊（三―六、一三二六）

〈阪本龍門文庫蔵〉

後補薄縹色表紙（二五・九×一八・五糎）、左肩、打付けに「老子口義　坤」と墨書。右上隅に墨「致」字があるが、後筆であろう。料紙は斐楮交漉紙。

巻頭「老子鬳齋（ママ）口義下」、次行低五格「鬳齋（ママ）　林　希逸」、第三行低三格「上德不德章第三十八」と題す。尾題は無い。

無辺無界、字面高さ約一六・五糎、毎半葉八行行十二字、林注は毎章経文後改行低一格大字単行行十一字。柱題署、丁付無し。返点、送り仮名、振り仮名、音訓合符、連続符を附す。後副葉に次の伝領識語が墨書さる。

此一書元禄六年龍集癸酉秋七月日

亀泉大機方小師持来付于予

天岩明啓於圓光室内誌

「瑞巖圓光／禪寺蔵書」（朱長方）、「龍門文庫」（白長方）の印記有り。天岩明啓は享保年間（一七一六～一七三六）のはじめ西天目瑞巖山高源寺を再興したことで知られる、その人か。

句解道德經　〔慶長〕刊　古活字

首に「老子鬳齊（ママ）口義發題」（次行低六格に「鬳　齊（ママ）　林　希逸」と題署）を冠す。末尾より二行を隔て「老子鬳齋口義發題」と尾題有り。

巻頭は「句解道德經上」、次行低六格「鬳　齊　林　希逸」、第三行低三格「道可道章第一」と題す。尾題は首題に同じ。

四周双辺（二〇・九×一五・八糎）、有界、毎半葉七行行十七字、注小字双行十七字、経文句下に割注として挿入。版心粗黒口双花口魚尾、中縫「老子句解上（下）（丁付）」。

本書諸本は各章経文全文を先に掲出し、其の末に接し、改行の上、一格を低して大字或いは小字で章注の全文を一括して挙げるのが殆ど常例である。此の本に限っては、通例の漢籍注釈書の如く句下に適宜相当注文を挿入している。書名に「句解」を冠する所以であろう。同類の本は管見に入らず、本古活字版が何本に基づいて翻印されたものなのか、検証を一層困難にしている。諸本間の本文の比較研討を要し、その上での後攷を俟たなければならない。但、荘子にも同程式七行行十七字の『句解南華眞經』〔慶長〕刊古活字版が知られ、内閣文庫蔵本等伝本は多い。刊行状況に関連性を想定してよいように思われる。『増補古活字版之研究』は「慶元中刊本」として、同書四種中の第三に挙げている。『弘文荘古活字版目録』は「むしろ慶長末期、鬳齋口義本中、最初出とすべきであろう」と。予断は許されず、今暫く、程式上後出整版本に近似する以下の古活字版三種の前に録して後察を期したい。

〈東洋文庫蔵〉　岩崎文庫　　和大二冊（三―A―a―2）

後補縹色表紙（二七・六×一九・一糎）、打付けに「老子句解　植字板上（下）」と墨書。裏打ち修補が施される。「雲煙家／蔵書記（上部に「子孫永保」と横書）」（灰青長方）、「坐／閑」（朱方）、「武／弖」（白円）、「雲邨文庫」（朱長方）の印記あり。江戸後期の書画肆安西雲煙（名は武、字山君、文化四年〈一八〇七〉生、嘉永六年〈一八五二〉没）、明治・大正期の鉱物学者、書誌学者和田維四郎（若狭小浜の人、安政三年〈一八五六〉生、大正九年〈一九二〇〉没）旧蔵書。

『岩崎文庫貴重書書誌解題　Ⅲ』著録、同書及び『増補古活字版之研究』図録篇に書影採録。

〈武田科学振興財団杏雨書屋蔵〉　　和大二冊（句解活板上）

緑茶色表紙（二七・五×一九・五糎）、「老子道德經上」

（下）」と墨書せる淡赤茶色の題簽を貼付。朱の句点・圏点・校字、墨筆で一部に訓点、眉上行間に誤植を訂正する校字また「一本」即ち古鈔本及び「王本」即ち王弼注本との校異の書入れ、希であるが諸家の注説の引用が有り、東坊城聡長（寛政一一年〈一七九九〉生、文久元年〈一八六一〉没）の自筆であろう。下冊後見返しに次の墨校読識語を存す。

文政七年梅雨窓下校之書王本者王弼註本也書一本者古寫本也

従三位聡長

天保九年正月廿三日與新大外記師身一過了時春雪明書窓

右大辨（花押）

また、首の遊紙表葉中央やや下辺りに「共二／　乙巳六月炳卿」の墨識が有る。乙巳は明治三十八年。「炳卿珍蔵旧／槧古鈔之記」（朱長方）の印記。内藤湖南明治三十八年六月取得旧蔵本。『新修恭仁山荘善本書影』著録。

〈弘文荘旧蔵〉　和大合一冊

未見。現所在未詳。栗皮表紙（二四・八×一八・四糎）全巻朱墨の書入れあり、と。『弘文荘古活字版目録』、『弘文荘古版本目録』著録。

老子虞齋口義　（内題「老子虞齋（ママ）口義」）〔慶長〕刊　古活字

首に、「老子虞齋口義發題」（次行低七格に「虞　齋　林希逸」と題署）を冠す。「發題」本文は全行低一格、末尾より二行を隔て「老子虞齋（ママ）口義發題」と尾題有り。

本文巻頭は「老子虞齋（ママ）口義上」、次行低七格「虞　齋（ママ）　林希逸」、第三行低二格「道可道章第一」と題す。尾題は首題に同じ。但、下巻は「齊」を「齋」に作る。

四周双辺（二二・五×一六・九糎）、有界、毎半葉八行行十八字、林注は毎章経文後改行低一格大字単行行十七字。版心粗黒口双黒魚尾、中縫題「老子口義上（下）（丁付）」。

天下皆知章第二注文「老子説得太刻苦」（上7ウ4）の「苦」を「若」に、谷神不死章第六の注文「而初意實不專主是也」（上12オ7）の「主」を「生」に、天長地久章第七の注文「莫之先而常存」（上13ウ7）の「常」字を「當」に、古之善爲士章第十五の経文「儼若客」（上22オ3）の「客」を「容」に誤るなど字形の近似に困る誤植が多く、また衍字脱字も目立つ。

底本未詳。『増補古活字版之研究』では同書古活字版四種の内、第二イとして著録されている。

〈斯道文庫蔵〉　浜野文庫　　和特大二冊

空押し雷紋地唐草紋丹表紙（三三三・六×二四・三糎）、外題は、表紙打付けに、上冊は「舊活字版老子鬳齋口義上」、その直下に小字で「白井宗因蔵／林氏校書入」と、下冊は「老子鬳齋（ママ）口義下」と墨書。全編に亙って墨筆の返点・縦点・送り仮名、又、行間天地に校字の書入れが有り、誤植字には加墨による訂訛が見られる。眉上或いは欄脚に同じく墨筆で「易説卦云（註）」「繫辞云（疏）」「尚書」「毛詩」「周礼註疏」「礼記（鄭注・疏）」「礼記集説」「中庸或問」「論語注」「孟子」「韻會」「韻府云」「史記」「漢書」「漢藝文志」「後漢書」「程氏遺書云」「朱子語類」「真西山云」「性理大全云」「筆乗云」「佛書云」「大明録入理章曰」「心経云」「禅家云」「杜光庭云」「蘇子由老子解」「老子翼云」「李卓吾老子評云」「諸子品節註云」「荘子」「列仙伝」「杜甫詩」「韓愈原道云」「山谷詩」「道春按」等と標記せる諸書との引証、諸家注説等の書入れがあるが、上巻は第二十九章まで、下巻は第四十五章に止まり以下にはこの種の書入れは見られない。本文及び天地の引証書入れには朱句点・合点、朱引が施されている。尚、上巻第十葉裏の「羅山随筆云々」等の書入れは他と筆跡が明らかに異なり、僅かであるが後人の書入れが混入しているようである。「白雲書庫」（碑形双枠）、「日暝斎／図書記」（朱方）、「林生／之印」（白長方）、「濱野文庫」（朱長方）、「麻生文庫」（朱長方）の印記有り。江戸初の幕府医官野間成大通称三竹（慶長十三年〈一六〇八〉生、延宝四年〈一六七六〉没）旧蔵。

尚、藍罫の用箋（左下郭外に「国四、大石屋」と印刷）一紙が挿入され「活字版老子口義　二巻／　道春先生書入／　林道春先生・白井宗因先生・日暝斎先生三大家之蔵印アリ／〇上巻十葉目ノ羅山随筆云々書入ノ一節ハ書体大ニ異レルハ後世学者ノ跡ヨリ手入レセシモノ故此ノ節ニ限リ朱点ナシ　他ハ皆道春先生ノ筆蹟ナリ／〇道春按々語所々ニアリ」の墨識が有るが、多くは失考であろう。

本書の書入れは、後掲、正保四年京林甚右衛門刊本の羅山首書と殆ど符応する。刊本の首書は全章に亙っており、本書入れは上述の如く分量においても其の過半にも満たないが、刊本からの転写ではないことは、字句に異同があり、また、彼に無い条項が散見していることによって顕かである。従って、刊本首書成立以前のより原初に近い内容を伝えているはずで、刊本の譌字脱文衍文を糺すことが可能であろう。また、全巻に及ぶ訓

点も同様で、正保四年刊本とほぼ一致するが、刊本として定着する以前の様態を伝える加点として注目される。

刊本首書に見られない書入れとして次の条項が認められる。

邵子觀物外篇下曰・老子五千言・大抵皆明物理、又曰老子知易體者也　（上冊見返し）

老子有河上公註、老子聖經云、秦時降峽河之濱、号河上丈人、亦曰河上公、授道安期生、前漢文帝好老子之旨、遺使詔問之云々　（發題第一丁ウ「河上公」）

漢藝文志、老子在道家者流、東坡云、道家者流、本出於黄帝老子、其道以清静無為為宗云々　（發題第二丁オ、「道家者流」）

翼云、老子之称經、自漢景帝始也、呉闕澤曰、漢景帝以黄帝老子義体尤深、改子為經、始立道学、勅令朝野、悉諷誦焉、　（發題第三丁ウ、尾題後）

莊子内篇、有大宗師、　（道冲章第四林注「大宗師」）

宋陳圖南號希夷先生、用老子語、　（視之不見章第十四）

〈宮城県図書館蔵〉　伊達文庫　和特大二冊（三〇五四八伊）

空押雷紋繋地花卉紋丹表紙（三三・七×二四・四糎）、外題「老子鬳齋口義発題上（下）」と墨書。「伊達伯／觀瀾閣／図書印」（朱方）、「伊達文庫〈左右に「宮城県／図書館」〉」（朱長方）の印記。

尚、長尾直茂「林羅山の『老子鬳齋口義』校訂及び施注について」は下巻第一六丁の落丁を指摘し、後述する国会図書館蔵の〔元和〕刊古活字版にも同丁の落丁があることから両版にテキスト上の関連が認められるかもしれないと述べる。稿者は此の落丁に就いては未確認。但、前掲斯道文庫蔵本には落丁は認められない。以下の伝本についても個々に確認を要する。

〈龍谷大学図書館蔵〉　和大二冊（〇二一―二八―二）

栗皮表紙（二九・〇×二一・〇糎）、外題無し。「写字臺之蔵書」（朱長方）の印記。『増補古活字版之研究　図録篇』収載。

〈仁和寺蔵〉　和大二冊

栗皮表紙（二九・〇×二一・三糎）、第二冊書題簽「莊子口義」と墨書、「莊」字に見消、右旁に「老」字を朱書、第一冊は題簽剥落。首六章に墨訓点の書入れが有る。「仁和寺」（朱方、飛龍紋飾枠）の印記あり。

〈尊經閣文庫蔵〉　和大二冊

栗皮表紙（二八・五×二一・〇糎）、外題無し。墨筆の返点・送り仮名・音訓合符・連続符、所々に振り仮名、字旁に誤植を

訂せる加筆が見られ、朱筆の句点・朱引、異訓の書入れが有る。墨訓点は斯道文庫蔵野間三竹旧蔵本のそれと殆ど同じである。「尊經／閣章」（朱方）、「前田氏／尊經閣／図書記」（朱方）の印記あり。

同　〔慶長〕刊　古活字

前掲本と同種活字を使用せる異植字版。首に、一格を低し「老子虞(ママ)齋口義發題」（次行低七格に「虞(ママ)　齋　林　希逸」と題署）を冠す。「發題」本文は全行低一格、末尾より二行を隔て「老子虞(ママ)齋口義發題」と尾題有り。

巻頭は「老子虞(ママ)齋口義上」、次行低七格「虞(ママ)　齋　林　逸希（下巻は希逸）」、第三行低二格「道可道章第一」と題す。尾題は「老子虞(ママ)齋口義上（下）」、但、下巻は「齋」を「齊」に作る。

四周双辺（二二・八×一六・八糎）、有界、毎半葉八行行十八字、林注は毎章経文後改行低一格大字単行行十七字。版心粗黒口、双花口魚尾或いは双黒魚尾、交互に用いられる、中縫題「老子口義上（下）（丁付）」。

前掲同種本に比し、活字の磨滅が進行しており、此の方が後出であろう。先行本の譌字誤植の多くがそのままに継承され、巻上巻頭の選者名両字を転倒し、發題の「以其借諭之語」（上3オ8）の「諭」字を「論」に、天下皆知章第二の注文「千變萬化相尋不已」（上7オ6）の「相」字を「成」に誤り、同注文「故曰音聲相和」（上7ウ8）の「和」字を欠き、道冲章第四の注文「道體雖虚」（上9ウ4）の「雖」字を「錐」に、載營魄章第十の注文「無雌雄交感之心則能抱一矣」（上17オ8）の「抱」字を「能」に作るなどの新たに生じている誤植誤脱も少なくない。『増補古活字版之研究』は同書四種の内、第二ロに分類して著録。

〈斯道文庫蔵〉　和大合一冊（〇九一―ト一六八―一）

薄縹色艶出し表紙（二八・一×二〇・〇糎）、ほぼ中央に「老子經　全」と打ち付けに朱書。墨筆の返点・送り仮名・縦点、朱の句点・朱引、誤植訂正校字等の書入れがある。見返しに「願正寺蔵」、後見返しに「法釵／文政十一戊子冬日求之／大日本舎深慧（慧字は元の字を擦り消しその右に加筆）」の墨識語が見え、「慈攝」（朱長方）、「飛驒國大野郡大名田村／白川文庫」（朱方）、「明治十三年？／改已降之印」（朱長方）、「小汀氏蔵書」（朱長方）、「慶應義塾大學／斯道文庫蔵書」（朱長方）の印記あり。『弘文

莊古版本目録』（弘文莊待賈古書目第四十五號、昭和四九）、『弘文莊善本目録』（弘文莊待賈古書目第五十號、昭和五二）著録。

〈御茶の水図書館蔵〉　成簣堂文庫　　和大合一冊

後補茶褐色古表紙（二六・七×一九・六糎）、ほぼ中央に「古版活字／　老子口義　單」、右下方に「蘇峰珍藏」と打付けに墨書。青・墨・紅・朱・緑筆の句点、墨で眉上に一本等との校語（誤植の訂正が多い）、行間に語釈等の書入れがあり、首の發題には朱声点・朱引が施されている。以上書入れは、巻上に留まり、下巻にはごく希に朱の校字が見えるのみ。「松田／本生」（朱方）、「島田翰／讀書記」（白長方）、「蘇峰／清賞」（朱方双郭）、「德富／護持」（朱方双郭）、「德富／所有」（朱方双郭）、「天下之公／寶須愛護」（朱長方）、「蘇峰學人／德富氏愛／藏圖書記」（朱方双郭）、「菅印／正敬」（白方）、「蘇／峰」（朱方）、「成／簣堂／主」（朱）の印記。島田翰、德富蘇峰遞藏。

その他、『増補古活字版之研究』は安田文庫蔵の堀杏庵旧蔵本一冊を著録しているが、現所在未詳。

同

〔元和〕刊　古活字

首に「老子鬳齊（ママ）口義發題」（次行低五格に「鬳　齋　林　希逸」と題署）を冠す。

巻頭は「老子鬳齊（ママ）口義上」、次行低七格「鬳　齊（ママ）林　希逸」、第三行低三格「道可道章第一」と題す。尾題は首題に同じ。

四周単辺（二〇・六×一四・六糎）、有界、毎半葉九行行十七字、林注は毎章経文後改行低一格大字単行行十六字。版心粗黒口双花口魚尾、中縫題「老子口義上（下）　（丁付）」、巻下首五丁の版心題は「老子口義上」と、巻次を誤る。

巻下第十六丁を欠き、其の箇所に巻上第十六丁を錯入。但、一行、低一格十七字（表第二―四行は行十八字）と字数が一字多く、同種活字であるが別版である。本書巻上第十六丁の当該箇所は首尾此の別版と符合しながら、後半終り近く「之蓄之言造化之間生養萬物也造物何嘗視之以爲」（載營魄章第十注文）の二十一字が脱落している。その他、誤字脱字転倒等誤植が目立つ。此の錯脱不備の様態が本版について一般的に言えるものなのかどうか、伝本極めて少なく管見に入れる本は掲出の国会図書館蔵本一本に過ぎないために明らかに出来ない。或いは同本に限っての特殊な事象とも考えられる。

尚、全編を通して新調の木活字が混在しているようである。

『増補古活字版之研究』は「慶長中刊」とし、老子鬳齋口義四種の内の第一に著録する。反町茂雄は、所用の活字は、後出の九行十九字本と同種、また、元和七年刊勅版『皇朝類苑』の銅活字と恐らくは同種で元和末刊とすべきであろう、との見解を示された（『弘文荘古活字版目録』三四六頁、但、元和勅版銅活字との通説は現今では否定され、木活字とされている）。確かに後掲〔元和〕刊本の字様と類似し、同類型の活字と認められる。同種活字とする確証は得難いが、今暫くは反町氏の鑑識に従う。但、此の方僅かに大きめの活字が目に付き、また、元和勅版所用の活字と同種だとすれば、両版共に磨滅が進行し過ぎているように見え、不審は残る。なお、精緻なる活字の類別同定の為の研究考察が要められよう。

伝本は以下の三本が知られるが、内二本は現所在不詳である。

〈国立国会図書館蔵〉　和大合一冊（WA七―五）

朽葉色表紙（二六・九×一九・〇糎）、外題無し。首の遊紙に、元和四年〈一六一八〉の林羅山題識を藍墨にて書写してある。以下の如し。

本朝古來讀老莊列者・老則用河上公・莊則用郭象列則用張湛・而未嘗有及希逸口義者・近代南禪寺沙門岩惟肖始讀莊子于耕雲老人明魏・而后惟肖始讀莊子希逸口義・尓來比々皆然・雖然未及老子希逸口義・至於今・人皆依河上・余嘗見道書全書載・老子數家註・又有老子翼有老子通・且又有林兆恩所解者・不遑枚数・希逸視諸家・最爲優・今余隨見隨點・而附倭訓于旁・他日雖有風葉之可校・而又吾家之敝帚・在于茲歟・

元和戊午孟春吉日辰令　道春[子]

（朱句点、朱引が施されているが、朱引は略し、異体字は通用の字体に改めた。第七行目末の「子」字は朱、挿入符を付し加筆されている）

『國立國會圖書館所藏古活字版圖録』は、この題識を羅山自筆と認めている。そうであれば、本古活字版の刊行時の下限は元和四年正月という事になり、勅版活字使用説は成り立たない。確かに筆跡は羅山のそれを思わせ、末の署名も自署めいて見え

るが、しかし、自筆と鑑定できる確証は無く、また、もし自筆であれば、普通に考えればこの本は羅山の旧蔵書のはずであろう。然るに、旧蔵者を示す印記識語等は無く、伝来不詳とされている。恐らくは、訓点等の書入れとともに、後人による羅山本からの移写に掛かると思われる。

全編に亙り墨筆で返点・送仮名・縦点・振仮名、上巻には朱句点、朱引が施され、希に眉上に墨・藍筆の引証、天地行間に朱墨の校字書入れが見られる。以上、首の羅山題識も含め、書入れは朱墨藍筆共に一手のごとくである。「東京／図書／館蔵」（朱方）の印記あり。『国立国会図書館所蔵貴重書解題　第二巻』、『國立國會圖書館所藏古活字版圖録』著録。『増補古活字版之研究』図録篇収載。

尚、元和四年の羅山識語は、後に掲出する大東文化大学図書館高島文庫蔵〔江戸初〕写寛永三年羅山自筆識語本、内閣文庫蔵〔江戸初〕写所謂羅山手校本にも見えるが、何れも自筆とは認めがたい。又、正保四年（一六四七）京林甚右衛門刊本及び同五年豊興堂刊本の末に尾跋として刻入されているが、尾の年紀が無く、字句に僅かながら相違が認められる。『羅山林先生文集』巻五十四（題跋四家蔵本）に収載。

〈大島雅太郎旧蔵〉

未見。『増補古活字版之研究』著録。現所在未詳。

〈弘文荘旧蔵〉　一冊

未見。水色表紙（二六・八×一九・〇糎）、原装。「殘花書屋」朱印。戸川浜男旧蔵。現所在未詳。『弘文荘古活字版目録』（弘文荘待賈古書目録第四十二号）著録。

同

〔元和〕刊　古活字

首に、一格を低し「老子鬳齋（ママ）口義發題」（次行低七格に「鬳齋　林　希逸」と題署）を冠す。「發題」本文は全行低一格。本文巻頭は「老子鬳齋（ママ）口義上」、次行低九格「鬳　齋　林　希逸」、第三行低三格「道可道章第一」と題す。尾題は首題に同じ。但、下巻は「齊」を「齋」に作る。

四周双辺（二〇・八×一四・九糎）、有界、毎半葉九行行十九字、注改行低一格大字単行十八字。版心粗黒口双花口魚尾、中縫題「老子口義上（下）（丁付）」。

前掲本と所用の活字、版式とも類同であるが、一行の字数が此の方二字増え、従って全体の紙数が減少している。『増補古活

字版之研究』は同書古活字版四種の内第四に挙げ、「本書の活字は元和勅版の活字を襲用していると思われる」と。反町茂雄は、上述の如く十七字詰本と同活字と観る（『弘文荘古活字版目録』）。元和勅版所用活字との同定は尚検証を要すると思われ後考を期す。

〈慶應義塾図書館蔵〉　星文庫　　和大二冊（H三五七）

丹表紙（二六・五×一九・二糎）、上下小口裁断、「老子口義上（下）」と打付けに墨書。全巻に亙って墨筆の返点・送り仮名・縦点・振り仮名、朱句点・朱引が施されている。「星氏／之印」（朱長方）、「慶應義塾図書館蔵」（朱長方）の印記あり。星亨（嘉永三年〈一八五〇〉生、明治三十四年〈一九〇一〉没）旧蔵。『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』著録。『補増古活字版之研究』図録篇収載。

〈弘文荘旧蔵〉　　和大二冊

未見。『弘文荘古活字版目録』（弘文荘待賈古書目第四十二号）の著録に拠る。原装渋色表紙（二六・九×一九・四糎）、巻首少し汚損、「殘花書屋」「寶玲文庫」の朱印、と。尚、『弘文荘待賈古書目第十號』にも同種本が掲載されており、「黒表紙、上巻巻頭に　鵲巣文庫所蔵之章　なる大印を捺してあり。改装本、補修あり」とあって、別本の様であるが、掲出された巻上巻頭の書影を観れば、墨訓点、紙面の汚れの様態から同一本と判ぜざるを得ない。不審である。

〈若林正治蔵〉　存巻上　　一冊

未見。『補増古活字版之研究』著録。

同

二巻　宋林希逸撰　闕名者点
寛永四（一六二七）刊（京　安田安昌）
覆〔元和〕刊古活字版

原装は栗皮表紙、原題簽「老子經乾（坤）」。首に、一格を低し「老子鬳（ママ）齋口義發題」（次行低八格に「鬳　齋　林　希逸」と題署）を冠す。「發題」本文は全行低一格。末尾より三行を隔て「老子鬳（ママ）齋口義發題」と尾題有り。

本文巻頭は「老子鬳（ママ）齋口義上」、次行低九格「鬳　齋　林　希逸」（下巻は「齋」を「齊」に作る）、第三行低三格「道可道章第一」と題す。尾題は首題に同じ。但、下巻は「齊」を「齋」に作る。

四周双辺（二〇・三×一四・八糎）、有界、毎半葉九行行十九字、注改行低一格大字単行十八字。版心粗黒口双花口魚尾、中縫題「老子口義上（下）　（丁付）」。返点・縦点・送り仮名を附す。

下巻尾題後二行を隔て

寛永四暦歳次丁卯臘月吉旦

洛陽烏丸通大炊町

安田安昌新刊于容膝亭

と刊記三行が有る。

本版の底本が前掲〔元和〕刊古活字版七行十九字本であり、その覆刻であることは、版式、字様字形が酷似していることによって明らかである。但、覆刻に際しては、發題の「嘗見秦獻公」（上1オ8）の「秦」を「泰」に作り、古之善爲士章第十五の経文「儼若客」（上19オ9）の「客」を「容」に作る等の底本の誤植が、訂正される一方で、道可道章第一の注文「正要就心上理會」（上六オ1）の「正」を「上」に、天地不仁章第五の注文「鼓舞出入」（上11オ3）の「入」を「人」に誤る等新たな誤刻も生じている。

この時期江戸初、前期刊行の和刻本漢籍に通例の如く、加点者は明らかでない。正保四年刊本以降の所謂羅山点本に先行する訓点本として注目されるのであるが、所々相違するところが確認されるものの、両点の関係の解明は今後の課題であろう。

尚、末の刊記三行の上下の匡郭両端に切れ目があり、入木の痕跡が明白である。入木される前の印本は未だ管見に入らず、大東文化大学図書館高島文庫、内閣文庫蔵本の如き初印とも見れる早印本にも既に此の挖改痕が認められる。存疑のまま、暫く、初印時に既に此の入木がなされていたと看做して、安田安昌を刊行者と比定しておく。長澤規矩也は、此の三行の入木部分に異版があることを指摘された。『和刻本諸子大成第九輯』の景印当該書の解題で「今回の底本は、内閣文庫所蔵本の文字が甚だ鮮明であるので（略）これを借印したが、架蔵本に、之に勝るとも劣らぬ原装初印本があり、共に刊記が入木になってゐる。この入木部分が架蔵本では、下部の匡郭が圖示する如く、上へとずれてゐる。しかも、本文が同版であるのに、この刊記の文字は異版であることが、特に「吉旦」の二字、中でも「旦」字で明かである。そこで強辯すれば、架蔵本の不體裁を改めたものか。それにしても、無刊記の同版初印本は未だ見ていないのが不思議である」と述べ、内閣文庫所蔵本と氏架蔵本の刊記部分の書影を特に対比掲載して注意を喚起されている。以下に掲出する諸伝本の大部分について、その刊記が何れの版であるのか精査を怠っている。後察を期したい。

安田安昌は菅得庵（名は玄同、天正九年〈一五八一〉生、寛

永五年〈一六二八〉）の弟子、寛永五年六月十四日、師を刺殺し処刑さる。寛永四年に『列子鬳齋口義』を、同五年に惺窩点『五経』を刊行している。

〈大東文化大学図書館蔵〉　高島蔵書　　和大二冊（T一七六）

栗皮表紙（二九・三×一九・〇糎）、題簽剥落し、その跡に「老子經　上（下）」と打付けに墨書、両冊とも右肩に矩形の張紙があり「冬」と墨書、その字の右上に「辰」と朱小字で加筆さる。刊記下に「安／昌」（朱鼎形）の印が捺され、初印に近い早印本、下方匡郭は上に浮いている。朱句点・圏点・朱引の書入れが施される。首に遊紙二葉を附綴し、史記三注本老子伝（三注は割注）を移写、朱句点・朱引、墨訓点が付され、江戸前期頃の書写と思われる。巻上末葉重複。「備前岡山城／清泰院蔵書」（墨長方）、「高島蔵書」（朱長方）、「大東文／化大学／図書館」（朱方）の印記がある。清泰院は岡山藩主池田氏の菩提寺国清寺の末寺で、もと法源院と言い、万治元年（一六五八）池田光仲の命により清泰院と改められた。実業家、宋元明清の書跡法帖類等美術品収集家として知られる高島菊次郎（明治八年〈一八七五〉生、昭和四十四年〈一九六九〉没）旧蔵書。

〈内閣文庫蔵〉　　和大二冊（子二三五―九）

後補香色表紙（二九・〇×一九・三糎）、書題簽「老子口義乾（坤）共二冊」と墨書。印記無し。早印本。『和刻本諸子大成第九輯』所収影印本の底本。

〈内閣文庫蔵〉　林羅山本　　和大合一冊（三一一―一八八）

香色表紙（二八・三×一九・一糎）、打付けに「老子口義上（下）」と墨書。早印、刊記下の匡郭にずれは無い。上巻に朱句点・朱引、全巻に朱圏点の書入れが見え、下巻末葉裏の匡郭左辺外下方に「春信一見」と朱識語があり、朱は同人、則ち林梅洞の筆であろう。巻上第十四・十五葉の間に一紙を綴じ込み、載營魄章第十冒頭の「載營魄」句の点読例を諸家の注説に拠って列挙してある。これは、恐らくは羅山手筆で、承應元年（一六五二）崑山館道可處士刊林羅山撰『老子經抄』三巻に殆どその侭に収載され、其の草稿の基となる書付なのであろう。刊本の誤脱を糺すことが出来、以下、その全文を掲出しておく。

載（ノセテ）營魄（ヲ）抱一（アハセヒトツニシテ）能無離（クハナル、）乎

載（ノセテ）營魄（ヲ）抱一

載（セテ）營魄（ニヲ）一　　右三點林希逸

載（リテ）營魄（ニ）一　　河上公　　載（ノリテ）營魄（ニ）抱一（イテヲ）能無離（ラシバナル、カ）乎　朱子

載（タマシヒタマシヒニ）營魄（ニ）抱一（アキラカナルタマシヒ）

載（イテ）營魄（ヲリテ）一　　王弼

載(ノセテ)營(ヲ)魄(ニ)　蘓子由
(トマレルタマシヒ)
載(ハジマメグレタマシイテ)營魄抱(ヲ)一　呂吉甫
載(ハシメテナシテ)營(ヲ)魄　李息斎
載(ノリテ)營(イノタマ)魄(ニ)　李宏甫
載(ノリテ)營(チノミチ)魄(ニ)　焦弱侯
載(セテ)營(ウカレタルタマシヒ)魄(ヲ)　同人老子評苑
(ヤトレル)

(以下裏面)

楚辞遠遊篇

載(ノリテ)營(クハエテアキラカナルタマシヒニ)魄(ニ)而登(ノホルハルカナルニ)霞兮　朱子
載(ノスノセイタリ)營(タマシヒヲ)魄(ヲ)　王逸
載(スノセイタリ)營(メクレルヲ)魄(ヲ)　洪慶善

楊子法言五百篇

月未(タ)望(ナラス)則載(ハシムヒカリヲ)魄(ニ)于西(ツクスナハ)既(ヲス)望(フ)則終(ヒカリヲ)魄(ニ)于東(レムカヘル)其遡(ニ)於日(カ)乎

李軌注

載(ハシムミカツキヲ)魄(ニ)于西(ニ)　宋咸　司馬光改魄作朏
月未(タ)望(ナラ)則載(ノル)魄(ニオイテス)于(ニツクスナハ)西既(ヲス)望(ヲス)則終(ル)魄(ヲ)于(テス)東(ニ)　朱子
(トキハ)

右載営魄多説今姑見老子諸家註楚辞註朱子辨證楊子法言註等而聊加訓點以備使覧　羅山子

(以上自署を除く人名・地名に朱引き)

「江雲渭樹」(朱長方、「江」「謂」二字白文)、「林氏／蔵書」(朱方)、「昌平坂／学問所」(墨長方)、「浅草文庫」(朱長方)、「内閣／文庫」の印記あり。

〈東京大学総合図書館蔵〉　南葵文庫

和大二冊(B六〇—二一五五)

栗皮表紙(二八・二×一八・一糎)、題簽は殆ど剥離缺失し、辛うじて下冊の上部の「老子經」三字部分が残る。「進藤／文庫」(朱方)、「淺草／文庫」(朱釣鐘形)、「南葵／文庫」(朱方)、「東京帝／国大学／図書印」(朱方)の印記。また、下冊の後表紙に「大阪府下野大山子大左儀子波／松本重太郎其他色々／実業学舘／舘長／土井晋吉」の墨書がある。土井晋吉は明治期の簿記学者。大槻如電(弘化二年〈一八四五〉生、昭和六年〈一九三一〉没)旧蔵。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉　和大二冊(一二六・一—七⑤)

栗皮表紙(二九・一×一九・二糎)、外題無し。首四十七章に朱句点圏点朱引きが施され、ごく稀に眉上に墨筆で標注の書入れがある。表紙右下に「天香園蔵」と印刷した書票(黄色地茶色刷り)を貼付。「天理図／書館蔵」(朱長方)の印記あり。

〈宮城県図書館蔵〉　養賢堂文庫　　和大二冊（三〇五四九養）
後補香色表紙（二六・五×一七・七糎）、天地少しく裁断される。書題簽「老子經　上（下）」。朱の圏点合点、朱引きが施され、訓點が訂正さる。眉上行間に墨筆の書入れが周密で字句を解釈敷衍する注説が多く、〔寛文〕刊即非如一校本との校合が見られる。「伊達氏伯／家蔵寶書」（朱長方双郭）、「宮城書／籍館図／書之印」（朱方）、「養賢堂文庫〈左右に「宮城縣／図書館」〉」（朱長方）の印記あり。仙台藩校養賢堂旧蔵書。

〈建仁寺両足院蔵〉　　和大二冊（八十二番箱）
栗皮表紙（二七・八×一八・五糎）、原題簽を存す。朱筆で訓点を訂正。「両足院」（白長方飾枠）の印記あり。

〈筑波大学附属図書館蔵〉　和大合一冊（ロ八八四―二八八）
後補淡香色表紙（二九・四×一九・五糎）、「老子口義」と打付けに題書、右に「廿九　合壱巻」墨書さる。刊記入木の箇所、下方の匡郭部分が大きく上へずれている。「南山／北坊」（朱方）、「蔵書印／和書〈外縁に「東京教育大学／附属図書館」〉」（朱横長双円）の印記あり。高野山清浄心院旧蔵。

〈東北大学附属図書館蔵〉　和大合一冊（教養一二六―三八B）
後補茶色表紙（二七・三×一八・二糎）、「老子道德經　完」と打付けに墨書。眉上に極稀に朱筆で『韓非子』の引用書入れが見られる。前掲本と同様刊記入木の箇所の下方匡郭部分が大きく上へずれている。「中嶋／典謨」（白方）、「晴山／園庫」（紫方）、「第二高／等学／校図書」（朱方）の印記あり。

〈龍谷大学大宮図書館蔵〉　和大一冊（三二六・一―一六―W）
栗皮表紙（二五・七×一八・〇糎）、外題無し。希に朱引、眉上に墨筆の字音字義の書入れがあり、また鉛筆の書き込みが見られる。後見返しに、

享和二年□仲夏求之　　良□所蔵（花押）

の求得識語あり。「文學寮／圖書印」（朱方双郭）の印記。

〈斯道文庫蔵〉　　和大合一冊（一二六―ト三八）
香色表紙（二六・五×一七・八糎）、題簽剥落し、その痕に「老子鬳齋口義」と墨書。刊記下方の匡郭上に浮く。末行に「全壱冊□□門蔵□（印）」と墨書捺印（印文「長谷／川氏」白長方印）、後見返しに「魚沼郡妻有之□□（二字墨消）／□□（二字墨消）持之／長谷川善左衛門」の墨識。「雒亭／之印」（白方）、「九十□／木禽／主人」（朱方）、「慶應義塾大學／斯道文庫藏書」（朱長方）の印記。

〈小浜市立図書館蔵〉　酒井家文庫　　和特大二冊
縹色表紙（三〇・九×二一・一糎）、第一冊に書題簽「老子

壹」と題す、第二冊は欠落。「遠敷郡／雲濱圖／書館印」（朱方）の印記あり。

〈京都大学附属図書館蔵〉　巻下配寛永六年刊本　谷村文庫

和大合一冊（一―六七　ロ四）

栗皮表紙（二七・九×一八・五糎）、題簽剥落。本帙は、下巻を本版の覆刻本、寛永六年刊本（後記参照）で配せる取合せ本。上巻は天地行間等余白に朱墨の書入れが周密。墨筆には二手が認められ、諸書諸家注説の引証書入れが多いが、『老子翼』等からの移写と思われる。羅山等の注説をも淆え、行間には字義和訓等が添記されている。また本文及び墨書入れに朱筆で句点送仮名振仮名朱引が施されている。「京都／大學圖／書之印」（朱方）の印記。

同

昭和五一（一九七六）刊（東京会）　古典研究会　影印内閣文庫蔵寛永四年京安田安昌刊本　和刻本諸子大成第九輯所収

又

萬治三（一六六〇）修（〔京〕門）　中野小左衛

界線を削り（従って無界）、原刊記を削除して改修。新たに入木された木記は次の如し。

萬治三庚子歳初春吉
中野小左衛門板行

〈東京大学総合図書館蔵〉　和大一冊（B六〇―二四三二）

縹色表紙（二五・六×一七・七糎）、書題簽「老子鬳齊口（ママ）養（ママ）発題　全」。朱句点・鉤点・圏点・声点・朱引が施され、所々訓点が訂正されている。眉上行間等余白に朱墨の字義句解等の書入れが多い。「□六／□」（朱方）、「田中／図書」（朱方）、「東京帝／国大学／図書印」（朱方）の印記あり。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉　和大一冊（一二六・一―一二七）

丹表紙（二七・六×一八・七糎）、書題簽「老子經　全」。上巻にのみ書入れがある。朱圏点の他、墨筆で振り仮名を加え、訓点が訂正さる。眉上には他章の関連文辞との引照、『楚辞』『荀子』等からの引用が見られる。「貞□／之印」（白方）、「三／鼎」（朱方）、「勢陽津城／富□蔵記」（朱長方）、「天理図／書館蔵」（朱長方）の印記、他に朱文方印一顆あるも印文不明。昭和五十三年六月十五日天理図書館受入印あり。

〈太宰府天満宮蔵〉　和大二冊（天満宮一七五）

黒色表紙（二六・二×一八・七糎）、印刷題簽「老子經　坤」、

乾冊は欠落。両冊それぞれの後見返しに次の如き奉納書きがある（墨書）。上方に右から左へ横書きで「奉寄進御寶前」と大書し、その下に「旹天和三年／筑前國穂波郡津原村／　施主齊藤勝左衛門尉實治／亥癸七月吉日」と。「西府文庫蔵書」（墨長方）、「太宰府神／社文庫印」（朱長方）、「天満宮」（朱横長円花飾り枠）の印記あり。天和三年筑前齊藤勝左衛門尉實治奉納本。

同　寛永六（一六二九）刊　覆寛永四年安田安昌刊本

首付、本文巻頭内題、尾題程式共に前掲寛永四年刊本に同じ。四周双辺（二〇・一×一四・七糎）、有界。行字数、版心程式、訓点ともに前掲本と変わるところ無く、明らかに寛永四年刊本の覆刻本である。

下巻尾題後二行を隔て「寛永六己巳歳正月吉日　新刊開」と刊記が有るが刊行者名を欠く。

前版刊行後実質僅か一年後の覆刊である。三十年後の萬治三年には前述の如く中野小左衛門が前版を修印しているので、その間、更にそれ以後も両版並び行われていたことになる。前版の刊行蔵版者である安田安昌は発刊の半年後、師菅得庵を刺殺し処刑されている。この事件に伴う安田私財であったであろう版木の扱いはどうであったのか。少なくとも、以後暫くは重刷出来る状況にはなかったであろう。いち早い覆刻本の出現の背景として此の事件が考えられるのではなかろうか。寛永四年刊の版木が萬治三年には中野小左衛門に帰していたことは明らかであるが、その間の趨向については詳らかでない。此の寛永六年刊本蔵版者も未詳。『増益書籍目録大全』元禄九年刊本、同寶永六年増修本、正徳五年修本に「老子經口義」が収載され、版元名はいずれも「中野小」とある。江戸中期に及んで同書版は中野小左衛門の支配下にあったようである。

〈東京大学総合図書館蔵〉　渡部文庫　和大二冊合一冊（B六〇―八一九）

栗皮表紙（二七・八×一七・五糎）、原題簽「老子經　乾（坤）」、但、上下両片とも損傷し「老」を欠いている。僅かに朱の振り仮名等の書き入れが見られる。「渡部文庫／珍蔵書印」（横書、朱船型）。大正十三年二月二十日渡部信（明治十七年〈一八八四〉生、昭和四十八年〈一九七三〉没、明治四十一年東京帝国大学法科大学を卒業、後同大学講師）寄贈本。

〈筑波大学附属図書館蔵〉　和大合一冊（ロ八八四―二〇四(2)）

後補淡香色表紙（二八・八×一九・二糎）、「老子經　上下」

と打ち付けに墨書。朱句点・訓点訂正・朱引き、天地に墨筆の字音字義等の書入れがある。「南山／北坊」（朱方）、「蔵書印／和書〈外縁に「東京教育大学／附属図書館」〉」（朱横長双円）の印記あり。高野山清浄心院旧蔵。

〈東洋文庫蔵〉　和大二冊（Ⅲ―一三―八〇二）

栗皮表紙（二五・三×一八・三糎）、天地少しく裁断さる。左肩に「老子經　上（下）」と白墨で打付け書。行間眉上等余白に朱墨の「褚本」「王注本」「一本」「古本」等との校異、「王弼本註」「王注云」「翼云」「龍按（曰）」「玖瑰按」等諸家注説の書入れ、また、間々訓点訂正、倭訓傍書が見られる。書入れは老子経文を対象とし、希逸注文には及ばない。書入れ文頭に朱或いは墨の小圏を加える所がある。巻下尾題次行に「文化九壬申六月淇園先生注加朱圏者雲鄰先生註無圏或黒圏者淇園先生譯解」の墨識語が有る。即ち書入れの多くは寛政九（一七九七）刊皆川淇園撰『老子繹解』二巻からの移写の如し。「雲鄰先生註」は未考。「今井／永清」（白方）、「東洋文庫」（朱長方）の印記。上田萬年（慶應三年〈一八六七〉生、昭和十二年〈一九三七〉没）旧蔵、昭和十三年十一月三十日上田寿寄贈本。

〈大阪天満宮蔵〉　和大一冊（子一四―二）

縹色空押し唐草卍繋ぎ表紙（二七・七×一八・五糎）、題簽剥落。見返しから遊紙にかけ、また天地等余白に墨筆の諸家注説、眉上稀に朱の校字、行間に訓点訂正等の書入れが見られる。「蛍／雪軒／珍蔵」（朱方）、「猶興書／院図書」（朱長方）の印記、近藤南州（嘉永三年〈一八五〇〉生、大正十一年〈一九二二〉没、松山の人、幕末明治の儒者）遺書。

〈筑波大学附属図書館蔵〉　和大合一冊（ロ八八四―一〇四）

後補朱色空押し行成表紙（二七・一×一八・二糎）、書題簽「老子経　林註　全部」と墨書。首十一章に朱圏点等の書入れ。末葉匡郭左辺外下方に「玄棟／形見」と墨署。「穆□／□□」（朱長方）、「小岐須」（朱小円）・「黙斎」（朱小方）、「蔵書印／和書〈外縁に「東京教育大学／附属図書館」〉」（朱横長双円）の印記。

〈叡山文庫蔵〉　天海蔵　和大合一冊（天海外典437六七九）

香色表紙（二七・九×一八・七糎）、左肩に「老子經」と墨書。「山門蔵本」（墨長方双郭）の印記。

〈国立国会図書館蔵〉　和大合一冊（八五三―八）

栗皮表紙（二九・〇×一八・二糎）、子持ち枠を印刷した題簽に「老子経」と墨書。朱の訓点訂正、眉上行間に字訓等和文

の書入れがあるが首十一丁までで第十二丁以降には見られない。「金氏珍蔵」（朱長方）、「東睿山／車□□／金□□／□□□」（白方）、「寄□園／図書記」（朱長方）、「武（ママ）田／之印」（白円）・「忠／忠」（朱円）、「帝国／図書／館蔵」（朱方）の印記。

〈大英図書館蔵〉　和大二冊（ORB　三〇―一六四）

未見。『大英圖書館蔵日本古版本目錄』著錄（29、図版26）。江戸後期頃の朱句点・朱引、朱筆の標注書入がある、と。アーネスト・サトー旧蔵書。一八八四年九月二十二日同館購入。

同

二巻　宋林希逸撰　〔林羅山〕点　〔江戸初〕写

〈内閣文庫蔵〉　林羅山本　　和特大一冊（三一・一―一九〇）

新補茶色刷毛目布目覆表紙（三一・五×二二・三糎）、「帝国図書館」と空押しがある。書題簽（子持ち枠印刷）に「老子鬳（ママ）齋口義　全」と。元は後補縹色厚表紙、此れにも題簽（子持ち枠印刷）が貼られ「老子鬳（ママ）齋口義　全」と墨書。擦れて墨色が薄れており、或いは元題簽か。

首に「老子鬳（ママ）齋口義發題」（次行低十一格に「鬳（ママ）齋　林希逸」と題署）を冠し、その尾題は首題と同じ。

巻頭は「老子鬳（ママ）齋口義上」、次行低十一格「鬳（ママ）齋　林　希逸」、第三行低三格「道可道章㐧一」と題す。尾題は首題に同じ。

無辺無界、字面高さ約二五・三糎、毎半葉十一行行廿一字、注小字双行行廿一字。注は各章末字下改行せずに直ちに書写されている。柱題署無し。経文注文共に返点・縦点・送仮名が施され、朱句点朱引を附す。また、全てで六条と少ないが、眉上に「礼記」「周礼注」「玉篇」等からの引用注が標記さる。これらは後出正保四年刊本等の羅山首書と概ね符合する。

末葉に本文と同筆で「元和戊午孟春吉日辰令　道春子」跋語が書写されているが、此れは、前掲国立国会図書館蔵〔元和〕刊古活字版の首副葉子に見えるものと全く同文である。本帙は羅山旧蔵であるが、此の跋語の筆跡も自筆では無いようである。

本書写本の行字数、また各章末字下直ちに小字双行で配する注の体式は上掲朝鮮旧刊本の版式と類似している。その朝鮮旧刊本が嘗て本邦に伝来伝存していたことは、上記楊氏観海堂旧蔵本が現存し、『經籍訪書志』の著録によって知られる。本写本の底本は此の朝鮮版であった可能性が考えられる。

『改訂内閣文庫漢籍分類目録』は林羅山手校本と著録する。

しかし、ごく希に脱字の訂正箇所はみえるが、それも本文と同筆で羅山手筆とは認め得ず、本文が校正校訂された墨跡は本書書写面からは窺えない。本文、訓点、標注、道春子跋語ともに、跋語の年紀である元和四年より差程隔たらない頃、羅山の門弟或いは近親者によって書写されたものと考えられる。

訓点は後掲正保四年刊本のそれとほぼ一致し、羅山点に違いなく、版本に先行する羅山点本として、前掲斯道文庫蔵浜野文庫本〔慶長〕刊古活字版の書入れ訓点、及び次掲大東文化大学図書館蔵〔江戸初〕写本の訓点とともに注目される。

「江雲渭樹」（朱長方、「江」「渭」二字白文）、「林氏／蔵書」（朱方）、「昌平坂／學問所」（墨長方）、「浅草文庫」（朱長方）、「大日本／帝国　／図書印」（朱方）、「内閣／文庫」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

同

二巻　宋林希逸撰　林羅山点並首書
〔江戸初〕写（勝直）　林羅山自筆識語

〈大東文化大学図書館蔵〉　高島蔵書　　和大一冊（T一八六）

朱色空押網目紋表紙（二六・一×一九・四糎）、外題無し。料紙は斐楮交漉紙。

首に「老子鬳（ママ）齋口義發題」（次行低六格に「鬳（ママ）齋　林希逸」と題署）を冠す。尾題は首題と同じ。末に「元和戊午孟春吉日辰令　道春子」の跋語を載せる。

本文巻頭は「老子鬳（ママ）齋口義上」、次行低七格「鬳（ママ）齋　林希逸」、第三行低二格「道可道章第一」と題す。尾題は首題に同じ。

無辺無界、字面高さ約二〇・〇糎、毎半葉九行行十八字、注改行低一格行十七字、経文よりやや小さめに書写。柱題署無し。経文注文共に返点・縦点・送仮名・振仮名が施され、朱句点を附す。また、眉上に行七字内外の首書があり時に喉部分に及ぶ。その他、地脚或いは章題下等の余白にも按語釈注が追補されている。此の首書釈注は正保四年刊本の標注とは多少の増損が認められるがほぼ符応している。

各巻尾題の後に次の墨識語（本文同筆）が有る。上巻には、

余嘗讀老子口義加倭訓点朱墨今茲孟夏依或人之求而講之於是往々隨諸家注解粗考而加写小字于鰲頭与旁側是所教授童幼者而已

丙寅五月十五日　　羅山子記

と、下巻には、

寛永三年七月四日講終八十一章依皆川志州之求
也　　羅山處士記之

と。また、末の遊紙に羅山自筆の奥書をみる。次の如し。

勝直(閑防印)童写老子口義且謄
我本點他日宜再考之
可也
　丙寅仲夏羅山處士「道春」(朱円印)

以上の奥書識語によれば、此の本は寛永三年五月羅山が勝直に書写させたものである。羅山はその後も皆川志州の求めに応じて講義を続け七月四日に終講、その間の講述をも同じく勝直に追写させたのであろう。次掲正保刊本の祖本と認められよう。尚、第十章中間に「載營魄」の訓説を蒐めた一葉（同料紙）が綴じ込まれている、此れは正保刊本には無く、上記内閣文庫蔵寛永四年刊本冊中に挟入されている羅山自筆の書付（31頁参照）と全く同文で、それからの転写と認められる。

「鹿苑山中人」（朱長方）、「高島蔵書」（朱長方）、「大東文／化大学／図書館」（朱方）の印記が有る。王子製紙社長等要職を歴任した実業家、槐安高島菊次郎旧蔵書。

老子虞齋(ママ)口義

（版心題「老子經」）二巻　宋林希逸撰　林羅山点並首書
正保四（一六四七）刊（京　林甚右衛門）

首、低一格「老子虞齋(ママ)口義發題」と、次行低八格に「虞齋(ママ)　林一　希逸」と題し、林氏発題を配す。「發題」本文は全行一格を低す。末尾より二行を隔て「老子虞齋(ママ)口義發題」と尾題有り。末の刊記の後に「後序」（版心題）一葉（訓点は無く、句点のみ）を付す。此れは上述したように、〔元和〕刊古活字版国立国会図書館蔵本首遊紙に藍墨にて書写された羅山題識、内閣文庫蔵〔江戸初〕写羅山手校本末葉、大東文化大学図書館蔵高島文庫〔江戸初〕写林羅山自筆識語本末の羅山跋語と同文である。但、以上の三本の跋語尾には「元和戊午孟春吉日辰令道春子」とあるが、本版は「(低十格)羅山子／(低二十格)道春書」と題署して紀年を欠いている。

本文巻頭は「老子虞齋(ママ)口義上」、次行低六格「虞齋(ママ)　林希逸」、第三行低三格「道可一道章第一」と題す。尾題は首題に同じ。但、下巻は「齋」を「齋」に作る。

四周単辺（一八・六×一三・九糎）、外郭（二五・四×一六・三糎）がある。無界、毎半葉九行行十六字、注改行低一格中字単行行十八字。首書小字毎半葉廿一行行卅三字、内郭直上部は

行九字。版心白口単黒魚尾、「老子經　巻上（下）　○（丁付）」の程式で題さる。返点・縦点・送仮名、一部に振り仮名を付刻。首書には句点のみを附す。

巻下尾題葉末行に次の刊記（陰刻）が有る。

正保四丁亥小春吉辰
三條通菱屋町林甚右衛門新刊

林甚右衛門は屋号麩屋、寛永から承應にかけての京の書肆。

〈神宮文庫蔵〉村井古巌奉納書　和大二冊（二甲二に二七四）

栗皮表紙（二八・五×二〇・〇糎）、元題簽剥落し、上冊左上に「道春点首書老子經　乾」と墨書さる。「発題」及び経文に朱引、朱の振仮名・校字・訓点訂正・参照章数等の書入れ、上層及び欄外余白に墨筆の書入れ（「田中氏云」「愚按」等の標記を認む）がある。「天明四年甲辰八月吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都勤思堂村井古巌敬義拝」（朱長方）、「林崎文庫」（双郭、朱長方）、「林崎／文庫」（朱長方）の印記。村井古巌敬義は明和天明期の京都の書賈、蒐書愛書家として知られる。

〈叡山文庫蔵〉真如蔵　和大二冊（真如　外典461外二四〇）

黄茶色空押七宝蜻蛉紋表紙（二八・四×二〇・〇糎）、第一冊前表紙は上皮が剥がれ芯地が露出している。外題無し。第二冊表紙右肩に「山門東塔南谷浄教房／眞如蔵百九十南」と朱書、また両冊の第一葉表喉近くにも同文が墨書されている。

又

（題簽「道春点首書老子經」）
〔修〕（京　林甚右衛門）

「後序」尾の題署「羅山子／道春書」の末字「書」が削除されている。伝本の多くは題簽を欠失しているが、都立中央図書館蔵加賀文庫本に遺存する題簽に「道春点首書老子經　乾（坤）」と題されており、此れを原題簽と認めてよいと思われる。

〈金沢市立玉川図書館近世史料館蔵〉古愚軒文庫

和大二冊（古一四・一―五二）

栗皮表紙（二八・五×一九・五糎）、外題無し。朱引、朱の句点・圏点・合点が施され、所々訓点が訂正さる。眉上及び行間余白に墨筆の諸家注説、校語等の書入れが見られるが、多くは後出増補本首書からの転写のようである。「疊翠／舘□」（墨方）、「疊翠／舘□」（朱方）、「□□／文庫」（墨長円）、「□成（？）」（墨長円）、「大礼記念金澤市立圖書館蔵書印」（朱長方）の印記。上冊末に「畳翠舘一拍」、下冊末に「畳翠舘一拍山人」との墨署が有る。漢学者大島熙（古愚軒）旧蔵書。

〈名古屋市蓬左文庫蔵〉　和大二冊（中一六三）

縹色空押七宝蜻蛉紋表紙（二八・九×一九・九糎）、題簽、上冊は剥落、下冊は上部左端の「首書」二字部分破損。巻上の一部に朱引、朱句点の書入れが見られる。「中邨氏／蔵書」（朱長方）、「祖先親愛書至子／孫愛護厳禁典賣」（朱長方）、「蓬左／文庫」（朱方）の印記。名古屋藩士中村習斎（享保四年〈一七一九〉生、寛政十一年〈一七九九〉没）旧蔵書。

〈斯道文庫蔵〉　安井文庫　　和大二冊（ヤ25C―3）

縹色表紙（二八・五×一九・〇糎）、題簽、下冊に後掲増補首書本の題簽を流用し貼付、上冊は書題簽「老子經（籠頭）　上」と題書。巻上の前半に朱引、朱訓点訂正等の書入れが見られる。「仙波学／校蔵本」（朱長方）、「小柳／氏蔵／書印」（朱方、双郭）、「財團法／人斯道／文庫印」（朱方）の印記。

〈新潟大学附属図書館蔵〉　佐野文庫

和大一冊（佐子―14―0―3）

未見。高橋智氏調査に拠る。

縹色表紙（二七・七×二〇・〇糎）、外題無し。「新潟／大学／図書」の印記。新潟県三島郡出雲崎町在住佐野喜平太（慶応二年〈一八六六〉生、明治四十五年〈一九一二〉第十一回総選挙に当選し、衆議院議員となる）収集旧蔵書。

〈静嘉堂文庫蔵〉　　和大二冊（四七―八〇）

栗皮表紙（二八・一×一九・八糎）、題簽剥落、その痕に「老子經」と墨書。「後序」を上巻末に誤綴する。巻上の経文注文の行間に朱引・朱句点・圈点・振仮名・語義等の書入れがある。「南陔（？）／文庫」（朱長方）、「秀□」（朱亀甲）、「静嘉堂蔵書」（朱長方、双郭）の印記。

〈東北大学附属図書館蔵〉　狩野文庫

和大合一冊（狩二―二二四七）

茶色空押卍繋ぎ覆表紙（二七・七×一九・五糎）、「東北帝國大學圖書」と空押があり、書題簽「老子鬳斎口義」と。元表紙は香色、「老子鬳齊（ママ）口義發題　全」と打ち付けに墨書さる。朱句点・圈点の書入れがある。「福聚山（左右に「尾州」「大野」）」（朱双円）、「武田氏／蔵書印」（朱長方）、「狩野氏圖書記」（朱長方、双郭）、「東北帝／国大学／図書印」（朱方）の印記。

〈内閣文庫蔵〉　昌平坂学問所本　　和大二冊（一九一―二八二）

茶色空押七宝蜻蛉紋表紙（二八・三×一九・七糎）、「老子標註　上（下）」と打付けに墨書さる。「昌平坂／学問所」（墨長方）、「文化庚午」（朱無郭）、「浅草文庫」（朱長方、双郭）、「内閣／文庫」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記。

〈都立中央図書館蔵〉　加賀文庫　　和大一冊（加賀八一二）

栗皮表紙（二七・六×一八・八糎）、原題簽を存す。但、乾坤の順を違えて貼付され、「乾」「坤」両字を墨消修正してある。「後序」を欠く。「加賀文庫」（朱無郭）、「東京都／立図書／館蔵印」（朱方）の印記。大阪出身の実業家加賀翠渓豊三郎（明治五年〈一八七二〉生、昭和十九年〈一九四四〉没）収集図書。

〈都立中央図書館蔵〉　加賀文庫　　和大合一冊（加賀八一三）

栗皮表紙（二七・九×一九・七糎）、乾冊の原題簽を存す。但、傷損甚だし。稀に朱句点の書入れあり。「加賀文庫」（朱無郭）、「東京都／立図書／館蔵書」（朱方）の印記。加賀翠渓豊三郎収集図書。

〈神宮文庫蔵〉　　和大合一冊（二甲二に一二七五）

後補香色雷紋唐草雲母引き表紙（二七・七×一九・三糎）、「老子口義　全」と打付けに墨書。「宮崎／文庫」（朱方）、「神宮／文庫」（朱方）の印記。

〈東京大学文学部国語研究室蔵〉　和大合一冊（七B—三〇）

縹色表紙（二七・七×一九・五糎）、書題簽（枠は印刷）「首書　老子經　乾（坤）」と墨書。「東京／大学／図書」（朱方）の印記。

同

（外題「林道春批點老子鬳齋口義」）　民国五四（一九六五）刊（台北　藝文印書館）　影印正保四年京林甚右衛門刊修印本　無求備齋老子集成初編所収　　唐中二冊

両冊とも扉裏に単辺木記があり「無求備齋據日本林／甚右衛門刊本景印」と。末の「後序」一葉を欠く。但、此の一葉は、五年後に出版された無求備齋老子集成續編所収の影印明暦三年京上村次郎右衛門刊本の尾に付されている。製本発行時の不手際によるものであろうか。

同

（題簽「首書道春点老子經」）　正保五（一六四八）刊（〔京〕　豊興堂〔中野小左衛門〕）　覆正保四年京林甚右衛門刊本

題簽は前掲正保四年刊本所用の版片を襲用したもののようである。序跋内題尾題版式行欵等並に前掲正保四年刊本に同じ。四周単辺（一八・二×一三・八糎）、外郭（二四・九×一六・二糎）。「後序」尾の題署は「羅山子／道春書」と、末字の「書」字が復活している。

巻下尾題後隔四行に「正保戊子暮春吉旦／書林豊興堂重刊行」と双辺木記が有る。正保四年十月京林甚右衛門刊本のやや粗なる覆刻本。初版刊行後僅か半年での重刊である。中野小左衛門はこの後も萬治三年（一六六〇）に寛永四年（一六一八）刊本

を修印している。この時期老子鬳齋口義の書版は寛永四年刊、同六年覆刊、正保四年刊、同五年覆刊の合わせて二種四版が存在していたことになる。同書の弘通の程が推量されよう。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉　和大二冊（一二六・一―一三五―一）

栗皮表紙（二七・六×一九・六糎）、書題簽「老子　上（下）」。眉上行間等余白に墨細筆の片仮名交じり注説の書入れが周密、また朱筆で訓点が訂正され、朱引が施さる。「葛野文／庫図／書之印」（朱方）、「天理図／書館蔵」（朱長方）の印記あり。昭和五十四年五月十五日天理図書館受入。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉　和大二冊（一二六・一―七）

栗皮表紙（二七・五×一九・四糎）、原題簽完存「道春点首書　老子經　乾（坤）」と題する。稀に朱引等の書入れが見られる。「天理／教校」（朱方）、「天理／図書／館印」（朱方）の印記あり。大正十四年十一月十日天理図書館受入。

〈京都大学人文科学研究所蔵〉　和大二冊（子XIV4C）

栗皮表紙（二八・四×一九・五糎）、原題簽殆ど破損、僅かに坤冊題簽の下半分を存す。首十九章に朱引朱句点の書入れがある。両冊の後見返しに「主小林器水」の墨署が認められ、下冊にはその左に「文政甲申二月／書林宇六□水（？）／代二百□」と墨識が有る。「京都大学／図書」（朱横長方）印記。

〈無窮会図書館蔵〉　平沼文庫　和大二冊（平沼三二七七）

栗皮表紙（二七・八×二〇・三糎）、原題簽破損、辛うじて「道　老子經　乾（坤）」と判読される。「惇允堂」（朱長方）、「日（？）羽氏」（向龍、白方）、「無窮会／神習文庫」（朱長方）の印記。

〈筑波大学附属図書館蔵〉　和大合一冊（ロ八八四―二〇五）

後補青紫色空押し網目布目表紙（二七・三×一八・六糎）、天地左右少しく裁断さる。書題簽「林註老子全　林道春訓点及頭書」と墨書。「残花書屋」（朱長円）、「蔵書印／和書〈外縁に「東京教育大学／附属図書館」〉」（朱横長双円）の印記。戸川濱男旧蔵本。

〈慶應義塾図書館蔵〉　和大合一冊（三二―九）

縹色表紙（二八・七×一九・八糎）、「道徳經」と打付けに朱書。全巻に亙って朱句点朱引が施されている。尾題と木記の間に次の読書加点識語が有る。

右聖語賢説之規範其辞確其文簡
懽然用之翕然信之故具遂詳閲加

朱墨者也

寛文二年冬十月十三日法橋可敬（印「向／□」）

また、第一葉右下方に「回生菴」の朱文長方印が捺され、上に重ねて「不凡子」と墨署、その下に「回生」（朱壺形）の押印が有る。「佐々木氏／蔵書印」（朱方）の印記。法橋可敬とは回生庵玄璞か。名は玄璞・可敬、回生庵と号す。医を曲直瀬玄朔に学ぶ。『医方大成口義』（寛永十五年自跋、正保四年刊）等の著述がある。

〈金沢市立玉川図書館近世史料館蔵〉　蒼龍館文庫

和大二冊（蒼二〇・一―七六）

縹色表紙（二八・〇×一九・九糎）、題簽欠落。「發題」にのみ朱引書入れ、稀に朱校字の書入れが見られる。「佐渡／家蔵」（朱方）の印記。高岡佐渡家旧蔵、内田豊咲寄贈書。

〈大東文化大学図書館蔵〉　高島蔵書　和大合一冊（T三六一）

栗皮表紙（二八・〇×一八・五糎）、外題無し。行間に墨筆（朱を交える）の諸家注説の引証、字義和訓等の書入れが周密、一部に朱句点圏点朱引が施さる。「高島蔵書」（朱長方）、「大東文／化大学／図書館」（朱方）の印記。高島菊次郎旧蔵書。

〈京都大学文学部蔵〉　和大二冊（中哲文C^{Na}6―7）

栗皮表紙（二七・五×一九・九糎）、「老子　乾（坤）」と墨書打付け書き。「後序」一葉を第一冊末に誤綴。「所$^{(?)}$見易$^{(?)}$／□」（朱内円外方）、「秀$^{(?)}$／宣$^{(?)}$」（墨内方外円）、「百々復太郎寄贈」（朱長方）、「京都／帝国大学／図書之印」（朱方）の印記あり。京の医師百々鳩窓（名は俊範・綱、鳩窓・鳩巣と号す。明治十一年〈一八七八〉没）旧蔵書。

〈東洋文庫蔵〉　大合一冊（Ⅲ―一三―八一〇）

栗皮表紙（二六・九×一九・〇糎）、題簽欠落。「後序」一葉を首「發題」の前に誤綴。「東洋文庫」（朱長方）の印記あり。

〈都立中央図書館蔵〉　特別買上文庫　和大二冊（特七八七六）

新補香色表紙（二八・三×一八・八糎）、書題簽「老子虞齊$^{(ママ)}$口義　上（下）」と墨書。「後序」を首の「發題」の前に誤綴。僅かではあるが墨筆の振り仮名・訓点訂正の書入れが見られ、朱圏点が施さる。両冊末尾題下方に「大進（花押）」と白筆で署さる。「桑木／蔵書」（朱方）、「東京都／立図書／館蔵書」（朱方）の印記。

〈九州大学文学部中国哲学研究室蔵〉　高瀬文庫

大二冊（漢子部74）

栗皮表紙（二七・六×一八・四糎）、乾冊は書題簽、坤冊は

原題簽遺存。朱墨の書入れが周密である。坤冊後見返しに「昭和二十四年己丑二月十一日／紀元二千六百九年紀元節／辰　講了／　八十二叟　惺軒　記之」の朱筆の識語があり、その他にも所々に同様の識語が散見する。昭和二十三年から二十四年にかけての高瀬惺軒武次郎（明治元年〈一八六八〉生、昭和二十五年〈一九五〇〉没）最晩年の講義の底本と見られる。「天泉堂」（朱長方）、「高瀬／武印」（白方）、「惺／軒」（朱方）の印記。

〈東京大学総合図書館蔵〉　南葵文庫　　和大二冊（B六〇―三六三八）

栗皮表紙（二七・六×一八・四糎）、乾冊のみ原題簽を存す。「淺草／文庫」（朱釣鐘形）、「南葵／文庫」（朱方）、「東京帝／国大学／図書印」（朱方）の印記。大槻如電旧蔵。

〈早稲田大学中央図書館蔵〉　和大二冊（ロ一三―一〇六七）

栗皮表紙（二八・四×二〇・一糎）、坤冊のみ原題簽が遺るが上下部分破損。朱の句点・圏点・朱引が施され、第二十二章までは所々眉上に墨筆の字義等の書入れが見られる。「告享／軒」（朱長円）、「卍□（其）／須□」（朱方）、「早稲田／大學／図書」（朱方）の印記。寄贈印に年月日を記さず「平田職康」と墨書さる。明治三十八年十二月、平田職康より「外記平田家文書」が寄託、後寄贈されている。それにともなう寄贈本であろう。

〈大東文化大学図書館蔵〉　高島蔵書　和大合一冊（T一八八）

巻上配延寶二年（一六七四）跋刊本。

縹色表紙（二七・〇×一九・〇糎）、後出延寶二年跋京上村次郎右衛門刊本乾冊の題簽を貼付、「乾」字下「坤」と墨書。「後序」一葉を欠く。所々朱句点圏点朱引があり、また朱・胡粉で訓点が訂正さる。「高島蔵書」（朱長方）、「大東文／化大学／図書館」（朱方）の印記。高島菊次郎旧蔵書。

〈大阪大学附属図書館蔵〉　岡田文庫　　和大二冊

栗皮表紙（二七・七×一八・三糎）、坤冊のみ原題簽を存し、乾冊には同程式に書した書題簽を補う。朱筆で合点・振仮名、訓点訂正、行間に語釈等の書入れ、外郭余白には墨筆で字義等の書入れが有る。坤冊首葉表喉部分に「西宮積翠寺」の墨署。「河内／岡田／文庫」（朱方）、「大阪大／学図書／之印」（朱方）の印記。岡田伊佐衛門旧蔵。

同

（題簽「道春首書老子經」）二巻　宋林希逸撰
林羅山点〔徳倉昌堅〕首書
明暦三（一六五七）刊（京　上村次郎右衛門）

原題簽は「道春首書 老子經 乾（坤）」（篆書）と題さる。首、低一格「老子虞齊（ママ）口義發題」と、次行低八格に「虞 齊（ママ） 林 希逸」と題し、発題を冠す。発題本文は全行一格を低す。外郭首書末より三行程を隔て「老子虞齊（ママ）口義發題終」と尾題有り。

本文巻頭は「老子虞齊（ママ）口義上」、次行低七格「虞 齊（ママ） 林 希逸」、第三行低二格「道可道章第一」と題す。尾題は巻頭内題に同じ。但、下巻は「齊」を「齋」に作り、「下」字下に「終」字がある。

四周単辺（一八・四×一三・七糎）、外郭も同じく四周単辺（二五・六×一六・九糎）。無界、毎半葉八行行十六字、注改行低一格中字単行行十八字。首書小字毎半葉廿二行行卅六字、内郭直上部は行十字。版心白口単黒魚尾、中縫題「老子經巻上（下）（丁付）」。返点・縦点・送仮名・振仮名、また行間字傍に本書中の関連箇所、或いは引用書名篇名等の引照注記、音義注を付刻。首書は経文注文の字句を墨囲以て標出し、その下一格を空け諸家注説を引載条挙、返点・送仮名・縦点を附し、各条頭に「○」を冠して改条の箇所を示す。

巻下尾題後一行を隔て、大字篆文で「羅山子／ 道春考焉」とあり、此れに接して末二行に

明暦三丁酉年孟夏吉辰
二條通玉屋町上村次郎右衛門新刊

の刊記が有る。

尚、本版頭書は、題簽には「道春首書」と題しているが、次掲延寳二年跋刊翻版の跋語に拠って、徳倉昌堅の編録であることが顕かである。上掲正保四年刊の羅山首書を取捨し大幅に増輯されている。

また、刊記前の「羅山子／ 道春考焉」両行下方の匡郭の両端に切目が見られ、入木改修された疑いも考えられるが、此の両行の無い伝本は未だ管見に入らず、暫く初印時より既に入木されていたものと看做して後攷を俟ちたい。

〈筑波大学附属図書館蔵〉 和大二冊（ロ八八四―二〇六）

香色表紙（二八・一×一九・七糎）、書題簽「老子虞齊（ママ）口義上（下）」と墨書。朱句点・圏点・合点・朱引が施され、行間に藍筆（希に朱を交える）で振仮名、和語による字義語釈等の書入れが多い。各冊見返しに墨筆の伝領識語を認めるが、判読は難しい。「蔵書印／和書〈外縁に「東京教育大学／附属図書館」〉」（朱横長双円）の印記。

〈東北大学附属図書館蔵〉 和大二冊（ZA一―三、二―二〇）

黒色空押菊花市松紋布目表紙（二七・八×一九・八糎）、外題無し。「鳥尾／蔵書」（朱方）、「東北帝／国大学／図書印」（朱方）の印記あり。

〈東北大学附属図書館蔵〉　狩野文庫

和大合一冊（狩二―二五五〇三）

後補香色艶出し表紙（二六・九×一九・一糎）、「老子鬳斎口義」と打付けに墨書。一部に朱句点・圏点・朱引が施され、行間に字義訓解等の書入れが有る。「玄／輔」（白内円外方）「玄輔」（墨長円）、「狩野博士集書」（朱長方）、「東北帝／国大学／図書印」（朱方）の印記。

〈大阪大学附属図書館蔵〉　懐徳堂文庫　　和大二冊

縹色表紙（二七・五×一九・七糎）、原題簽を存するが傷損あり。希に朱の句点・振仮名、朱引がある。「碩園記念文庫」（朱長方）、「懐徳堂／図書記」（朱方）、「大阪大／学図書／之印」（朱方）の印記。西村天囚（慶應元年〈一八六五〉生、大正十三年〈一九二四〉没）旧蔵書。昭和二十六年九月十日受入図書。

〈京都大学附属図書館蔵〉　　和大二冊（清家文庫一三九）

縹色表紙（二七・五×一九・六糎）、原題簽完存。希に朱の句点、合点が施さる。「京都／大學圖／書之印」（朱方）の印記。

〈早稲田大学中央図書館蔵〉　中村進午文庫

和大合一冊（文庫五―三六八）

縹色表紙（二七・八×一九・五糎）、書題簽「老子鬳齋口義完」と題さる。朱の句点・圏点・合点・朱引を施し、訓点が訂正され、眉上に朱の校字を認める。天地行間字傍に字義音注、『老子翼』との校異、「薛氏集解」「蘇注」「呉註」「道春曰」等諸家注説、「曲礼注」「左伝注」「中庸」「論語」「孟子」「史記」「白虎通」「荘子」「韓文」「文選」等諸書引証等の書入れが多い。所々鉛筆の書入れが混じる。「故中村進午博士記念圖書」（朱長方）、「早稲田大學法學部圖書室蔵書」（朱長方）、「昭和三十二年十一月二十七日／法学部研究室ヨリ移管」（朱長方）、「早稲田／大學／圖書」（朱方）の印記。国際法学者中村進午（新潟県生、明治三年〈一八七〇〉生、昭和十四年〈一九三九〉没）旧蔵書。昭和十五年一月十六日中村本夫寄贈本。

〈無窮会図書館蔵〉　平沼文庫　　和大二冊（平沼三二七八）

縹色表紙（二七・一×一九・一糎）、坤冊の原題簽遺存、乾冊分は欠失。両見返しに各章章題と章頭丁数を墨書列記し、行間に細墨筆で振り仮名、和文の字義訓釈、訓点訂正等の書入れ、希に朱圏点が施されている。また毎章に近人の老子注釈の草稿

紙箋一枚乃至二枚が挿入されている。紙箋第一紙の冒頭は「總論／老子虚無ヲ唱ウ云々」に始まり、以下章を追って経文を段句毎に書き出し、次行より小字で和文漢文両様の注釈を付す。嚴云、輔嗣云、河上云、司馬光云、蘇云、朱子云、希逸、呉澄云、薛云、億云、翼、考、本義、張尓岐、畢沅、念孫、倪云、魏源、高延第、樾云、奚侗云、馬敘倫云、李慈名等の標記が頻出し、参照引証する注説は清末民国学者の諸説に及び、また、傅弈本、碑本、景龍、広明有、日本本治要、河上作、永樂大典輔嗣本作、敦煌作、古本有等諸本との校異が見られる。末紙末尾に「八月十三日了」と。川合槃山自筆草稿か。「槃山／蔵書」（朱方）、「機外文庫」（朱長方）、「平沼氏／蔵書記」（朱方）、「無窮会／神習文庫」（朱長方）の印記。槃山川合孝太郎（慶応元年〈一八六五〉生、昭和十五年〈一九四〇〉没）旧蔵。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉　和大二冊（一八八・六―四四）

標色表紙（二七・三×一九・六糎）、新補書題簽「老子」と題書。所々に朱の句点、朱引が施され、行間等に墨筆の振仮名和訓等の書入れがある。「苔園田／部氏蔵／書印記」（朱方）、「田部苔園翁／遺　　書」（朱長方）、「大阪府立／図書館／蔵書之印」（朱方）の印記。明治四十五年三月三十日受入図書。

〈刈谷市中央図書館蔵〉　村上文庫　和大二冊（三〇七〇）

標色表紙（二七・〇×一九・五糎）、天地少しく裁断。書題簽「鼇頭老子經口義　乾（坤）」と墨書。朱句点・圈点・合点・朱引が施され、天地行間に墨筆で字義語釈等の書入れが多い。刊記第一行下の余白に「明星寺常住」と朱識、同葉外郭内左下方に「觀了之之」と墨識が有る。また、坤冊後見返しに「參河□□／　無一道者珎藏」と大字で墨署さる。刈谷藩御典医村上家蒐集襲蔵書。

〈東京大学総合図書館蔵〉　和大二冊合一冊（B六〇―一一四六）

標色表紙（二七・六×一九・〇糎）、原題簽を遺存す。首四七章に朱句点・朱引、朱筆の訓点訂正振仮名等の書入れあり。「三谷蔵書」（朱長方）、「東京帝／国大学／図書印」（朱方）の印記。大正十三年十二月三谷丁介寄贈本。

〈西尾市岩瀬文庫蔵〉　和大二冊（一八―一三）

標色表紙（二七・八×一九・九糎）、原題簽を遺存。朱句点・圈点・朱引が施され、「奇」本との朱筆校合書入れ、また上巻の行間、更には別紙を綴込んでの墨筆の書入れが見られ、「章夫案」との標記が認められる。下巻には冊中所々に書入れを予定した白紙が綴込んである。「岩瀬文庫」（朱長方）の印記。

〈九州大学附属中央図書館蔵〉　支子文庫

和大二冊（二一四ロ―四―一）

縹色表紙（二七・六×一九・六糎）、原題簽遺存。朱引あり。「支子文庫」（朱長方）の印記。同大学教養部教授であった田村専一郎（昭和五十年〈一九七五〉没）旧蔵書。

〈神宮文庫蔵〉　和大二冊（二甲六に二九七九）

香色表紙（二七・七×一九・六糎）、題簽剥落し、「老子　天（地）」と打付けに墨書。まれに朱引・朱句点、訓点訂正、また朱或いは白筆で和文語釈等の書入れがある。後見返しに「内宮奉納／文殿」と墨書。「祭典／課印」（朱方）、「神宮／文庫」（朱方）の印記。

〈神宮文庫蔵〉　和大二冊（二甲六に二五四五）

縹色表紙（二七・四×一九・七糎）、題簽遺存、但傷損あり。「幸田／光壽」（白方）、「御巫書蔵」（朱長方）、「昭和二十年九月献納／神宮文庫　御巫清白」（朱長方）、「神宮／文庫」（朱方）の印記。

〈神宮文庫蔵〉　和大合一冊（二甲二に一二七六）

後補縹色空押菊唐草紋表紙（二六・七×一八・八糎）、「老子虞齋口義」と朱書さる。朱引・朱句点が施され、経文の押韻字を朱の○□△等の符号で指示、また行間等余白に朱墨両筆の和文による句解引証注記等の書入れが詳密である。「山本／所蔵」（朱方）、「行餘学舎」（朱長方）、「寄納／神宮文庫／　橋村正璟」（朱長方）、「神宮／文庫」（朱方）の印記。

〈東京大学文学部蔵〉　和大二冊

栗皮表紙（二七・八×一九・六糎）、元題簽は坤冊分の中央部のみ残存。全編に亙り朱引の書入れが有る。各冊末葉裏に「鷲山ウ碌ミ子／元堆宰之（印、墨消）」の墨識語が有る。

〈新潟大学附属図書館蔵〉　佐野文庫

和大二冊（佐子―14―0―4）

未見。高橋智氏調査に拠る。

縹色刷毛目表紙（二七・七×一九・五糎）、原題簽遺存。「本多／蔵書」、「新潟／大学／図書」の印記。佐野喜平太旧蔵書。

〈都立中央図書館蔵〉　井上文庫　和大二冊（井上六一七）

縹色表紙（二七・四×一九・三糎）、坤冊のみ原題簽を存す。乾冊は書題簽「道春（老焉）老子經　乾」（篆書）と題す。「井上巽軒／蔵書之印」（朱方）、「井上文庫」（朱無郭）、「東京都／立図書／館蔵書」（朱方）の印記。昭和二十八年七月二十三日受入。巽軒井上哲次郎（安政二年〈一八五五〉生、昭和十九年〈一九四

四〉没）旧蔵本。

〈大東文化大学図書館蔵〉　高島蔵書　　和大二冊（T一七二）

縹色表紙（二七・五×一九・一糎）、元題簽遺存。希に朱引等の書入れあり。旧蔵者印二顆あれども判読不能。「高島蔵書」（朱長方）、「大東文／化大学／図書館」（朱方）の印記が有る。

高島菊次郎旧蔵書。

〈太宰府天満宮蔵〉　　和大二冊（小鳥居一一四）

縹色表紙（二七・四×一九・八糎）、題簽欠失、「老子口義一（二）」と打ち付けに墨書。一部に朱引・朱句点・圏点・合点の書入れが見られる。「倉輝軒」（白長円）の印記あり。

〈太宰府天満宮蔵〉　　和大二冊（天満宮一七四）

縹色表紙（二七・三×一九・三糎）、題簽欠失、「老子經」（篆文）と打ち付けに墨書。「西府文庫蔵書」（墨長円）、「太宰府神／社文庫印」（朱長方）、「天満宮」（朱横長円梅花紋枠）、「良海」（墨長円）の印記あり。

〈祐徳稲荷神社蔵〉　中川文庫　　和大合一冊（五九五）

栗皮表紙（二八・九×一九・九糎）、「老子經」と打付けに墨書。一部に朱句点の書入れあり。「直郷／之印」（朱方）、「中川／文庫」（朱方）の印記。鹿島藩鍋島家蔵書、直郷は第四代藩主（在任、享保十二年〈一七二七〉―寶暦十三年〈一七六三〉）。

〈京都大学附属図書館蔵〉　巻上配延寶二年跋刊本　　和大二冊（一―六七　ロ二七）

上冊は次掲延寶二年跋刊早印本を以て配せる取合せ本。

縹色表紙（二七・〇×一九・三糎）、書題簽「老子鬳齋口義上（下）」と墨書。上巻には朱句点・圏点・朱引、行間字傍に朱・白筆の書入れがある。「市原氏／蔵書印」（朱長方）、「文学博士谷本富寄贈本」（墨長方）、「京都／帝国大学／図書之印」（朱方）の印記あり。大正二年京大沢柳事件で同大教授を辞任した教育学者谷本富（慶応三年〈一八六七〉生、昭和二十一年〈一九四六〉没）の旧蔵書。

同

民国五九（一九七〇）刊（台北　藝文印書館）影印明暦三年京上村次郎右衛門刊本　無求備齋老子集成續編所収　　唐中二冊

外題は「林春首書老子經　一（二）」と表紙に直接印刷さる。巻尾に本来は正保四年刊本にあるべき「後序」（羅山跋語）一葉が誤綴されている。既述した通りである。底本は和訓等の書入本。「伴印／資芳」（方）の印影が残る。

同

（題簽は「増補首書老子經」）二巻　宋林希逸撰
林羅山点　徳倉昌堅首書
延寶二（一六七四）跋刊（京　上村次郎右衛門）　翻明暦三年刊本　増補首書本

原題簽は「増補首書一老子經　乾（坤）」と題さる。首に低一格「老子虞（ママ）齊口義發題」と、次行低八格に「虞（ママ）　齊　林　希逸」と題し、林氏発題を冠す。「發題」本文は全行一格を低す。外郭首書末より五行程を隔て「老子虞（ママ）齊口義發題終」と尾題有り。尾最終葉裏に徳倉昌堅の跋語（首題無く、末に「延寶二年甲寅秋七月徳倉昌堅／書於洛陽銅駝坊」と題す、無点）を付す。

本文巻頭は「老子虞（ママ）齊口義上」、次行低七格「虞（ママ）　齊　林　希逸」、第三行低二格「道可道章第一」と。上巻尾題は巻頭内題に同じ。下巻は本文末字の下隔一格に「大尾」とのみ題す。

四周単辺（一七・九×一三・九糎）、外郭（二四・九×一七・一糎）あり。無界、毎半葉八行行十六字、注改行低一格中字単行行十八字。首書小字毎半葉廿二行行卅六字、内郭直上部は行十字。版心白口単白魚尾、中縫題「老子經卷上（下）（丁付）」。経文注文首書並びに返点・縦点・送仮名、経注文にはまま振仮名を付刻。行間字傍に本書本文中の関連箇所、或いは引用書名篇名を示す引照注記、音義注を付刻。首書は、標出要語には墨囲、各条頭に「〇」を冠す。

尾の跋語末行に接し一格を下げ、「二條通玉屋町上村次郎右衛門重刊」の刊記一行が有る。

徳倉氏跋語の全文は以下の如し。

道德經上下篇余嘗採諸註之約言考
文字之來源書以付于梓已向二十年
舊刻靡乱脱誤惟夥於是乎剞劂氏重
請改正余不得辞之世務之暇增補不
足除却有餘以應其需庶幾有小補將
來云延寶二年甲寅秋七月德倉昌堅
書於洛陽駝坊

此の跋語に云う「舊刻」が前掲明暦三年刊本であることは明らかで、本版はその増補訂正版であるが、経注本文部分は殆ど覆刻に近く、鼇頭部分も改正部分を除けば覆刻と言ってもよい。「舊刻」では題簽に「道春首書」と題されているが、実は徳倉昌堅によるものであることが判明する。二十年足らずの間に「舊刻靡乱」し改版に及んだことは、これまた本書の弘通を物語るものであろう。

〈斯道文庫蔵〉　和大二冊（一二六―ト三七）

暗褐色色表紙（二六・九×一九・三糎）、原題簽は乾冊上部分のみ残存。経文・口義に朱引・朱合点、行間字傍に朱墨の振仮名字訓字義等の書入れが多い。朱墨同手。墨が後筆のようである。「慶應義／塾大學／斯道文／庫之印」（朱方）の印記。

〈慶應義塾図書館（日吉）蔵〉　和大二冊（K二二四―Ro一―二）

標色表紙（二七・一×一九・四糎）、書題簽「老子經」、下冊にのみ題下に「下」と。極希に朱引あり。上巻末に「滝下／耳洒菴曦山應周／　淳叟（花押）之」と、下巻跋尾に「大山下瀧朴叟（花押）」、下冊後見返しに「慈蓬幸淳石」と墨識あり。「慶應義塾／大學日吉／研究室印」（朱方）の印記。

〈九州大学附属六本松図書館蔵〉

和大二冊（二二六・二―R四五―一）

標色表紙（二七・三×一九・三糎）、原題簽の損傷甚だしく乾冊の「老子經　乾」、坤冊の「坤」が辛うじて判読できる。首書本文に亙り朱句点・圏点・朱引が施され（首書への加朱は第十章までで、以下は極まれに合点を認めるのみ）、行間に字義句釈等の書入れが見られる。巻上内題下に「旁以レ朱訓レ之者河上公注也雖レ然其間有二取捨一／都未二レ必都是一」と朱書されているように、経文の字傍に河上公注との引照が多く、章題下には河上公本章名を旁記する。見返しには墨筆の書入れも見られ、「史記」「漢書」「韓非子解老」等からの引用がある。後見返しに「義舟」、両冊末葉に「活秀」の墨署がある。表紙に福岡図書館所用の函架番号等を記したラベル及び「保管」と朱枠内に印刷された紙箋が貼付され、「保管」枠左外には「髙橋（氏）」（「氏」は朱刷）と墨書がある。「大正十五年三月二十日高橋求身」の寄贈印、及び「福岡高等学校」（朱重円、内円内に「図書」と）の蔵書印がある。大正十五年高橋求身寄贈私立福岡図書館（明治三十五年創設）旧蔵本。後に九州大学教養部等の母体となった旧制福岡高等学校（大正十年十一月創設、昭和二十五年三月廃校）が購入し本館に引き継がれたものであろう。

〈無窮会図書館蔵〉　平沼文庫　　和大二冊（平沼一〇三四九）

標色表紙（二五・八×一九・一糎）、乾冊の原題簽遺存、坤冊は欠失し書題簽を補い、「老子經　坤」と題す。朱句点・朱引の書入れがある。「遠湖／図書」（朱方）、「内田氏／図書記」（朱長方）、「明治三十年八月由／熊本帰誤落行李於／海此本為所浸湿者」（墨長方）、「無窮会／神習文庫」（朱長方）の印記。内田遠湖（名は周平、安政五年〈一八五八〉生、昭和二十年〈一九四五〉没）旧蔵書。

〈東京大学総合図書館蔵〉　三条公爵家本　　和大合一冊（B六〇―一一七五）

縹色表紙（二七・一×一九・四糎）、原題簽は乾冊分の下方の極一部「經　乾」部分のみ残存。「法縁寺」（墨無郭）、「三條／之印」（朱方）、「東京帝／国大学／図書印」（朱方）の印記。三条公憲旧蔵。大正十三年四月七日三條實憲寄贈本。

〈西尾市岩瀬文庫蔵〉　和大二冊（九八―二一）

縹色表紙（二七・六×一九・三糎）、原題簽を遺存す。朱句点・朱引・振仮名が施され、まれに行間に朱筆で字義句釈等の書入れがある。「岩瀬文庫」（朱長方）の印記あり。

〈早稲田大学中央図書館蔵〉　和大二冊（ロ一三―二五四九）

縹色表紙（二六・七×一九・三糎）、乾冊のみ原題簽が遺るが下半部分破損。朱の句点・朱引が施され、所々訓点が訂正される。経注本文の行間字傍に墨細筆（朱を交える）の字義句釈、引証注記等の和文を淆えた書入れが周密である。乾冊見返しには林羅山撰『老子經抄』、林經徳荘子後序、荘子鬳齋口義の林同序注等の要文を移写してある。「坂本／文庫」（朱方）、「多福藏書」（墨長方）、「早稲田／大學／圖書」（朱方）の印記。他に白文方印二顆あるも印文不明。

〈大東文化大学図書館蔵〉　前川蔵書　　和大二冊（M六二五）

縹色表紙（二七・〇×一九・二糎）、原題簽遺存。但、少しく傷損。上巻にのみ朱引、朱の振り仮名・送り仮名、訓点訂正、字義句解の書入れがあり、一部墨筆も交える。「雄徳山／豊蔵坊」（朱長方）、「大東文／化大學／圖書館」（朱方）の印記。豊蔵坊信海（寛永三年〈一六二六〉生、貞享五年〈一六八八〉没）手沢本。大東文化学院教授であった研堂前川三郎（昭和三十三年〈一九五八〉没）旧蔵書。

〈都立中央図書館蔵〉　特別買上文庫　　和大二冊（特七八七九）

縹色表紙（二六・八×一九・五糎）、原題簽遺存。朱引・朱句点振仮名の書入れあり。後見返しに「羽生里發戸村／觀乘院／隆覺」の墨所持識語。「落合氏／図書記」（朱方）、「安藤文庫」（朱長方）、「東京都立／日比谷図書／館蔵書」（朱方）の印記。

〈都立中央図書館蔵〉　市村文庫　　和大二冊（一二六IW三）

後補黄色表紙（二七・二×一九・一糎）、原題簽欠失。上冊は「老子經　天」と打付けに墨書。下冊には外題無し。経注文及び首書に朱引・朱句点圏点が施され、眉上・見返し等余白には、墨筆で難読字句を標出して音訓を旁記す。「市村氏／蔵書記」（朱長方）、「市村文庫」（墨無郭）、「東京都／立図書／館蔵

書」（朱方）の印記あり。東洋史学者市村讃次郎（元治元年〈一八六四〉生、昭和二十一年〈一九四七〉没）の旧蔵本。

〈慶應義塾図書館蔵〉　和大二冊（一一四―二九）

標色表紙（二七・一×一九・〇糎）、題簽欠落。朱句点・圏点、訓点訂正等の書入れがある。最終葉裏内郭左外に「翠里酒巻子貞」と墨識。「酒巻／□暠」（朱方）、「佐々木氏／蔵書印」（朱方）の印記。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉　石崎文庫　和大二冊（石一八八・六―一）

標色表紙（二六・八×一九・二糎）、題簽上左端一部傷損。白文方形の墨印一顆を認めるも判読不能。「大阪府立／図書館／蔵書之印」（朱方）の印記。奈良在住漢方医石崎勝蔵（弘化二年〈一八四五〉生、大正九年〈一九二〇〉没）創設私立石崎文庫旧蔵書。昭和二十六年十二月十七日受入。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉　和大二冊（一八八・三八②）

標色表紙（二六・八×一九・二糎）、原題簽遺存。朱句点・朱引・朱振仮名の書入れがある。白文方形印一顆を認めるも印文不明。「粟津／蔵書」（朱方）、「和田／蔵書」（朱方）、「大阪府立／図書館／蔵書之印」（朱方）の印記。和田義澄寄贈図書。昭和二十一年六月一日受入。

〈静嘉堂文庫蔵〉　中村敬宇本　和大二冊（四七―八〇）

標色表紙（二七・二×一九・四糎）、原題簽遺存。一部に朱引・朱句点・圏点の書入れがある。「中邨敬宇／蔵書之記」（朱長方）、「静嘉堂蔵書」（朱長方、双郭）、「中村本」（朱長方）の印記。中村敬宇（天保三年〈一八三二〉生、明治二十四年〈一八九一〉没）旧蔵書。

〈西尾市岩瀬文庫蔵〉　和大二冊（一四六―一五九）

標色表紙（二七・一×一九・〇糎）、題簽欠落。行間に白筆で字義句解等の和文の書入れが周密で、まれに朱引、また朱で訓点が補訂されている。「栗本／文□」（朱方）、「岩瀬文庫」（朱長方）の印記あり。

〈東北大学附属図書館蔵〉　狩野文庫　和大二冊（狩二―二五五〇二）

茶色空押卍繋ぎ覆表紙（二七・〇×一八・八糎）、「東北帝国／大学図書」と空押しされ、書題簽を貼付、「老子鬳斉（ママ）口義」と題さる。元表紙は茶褐色、原題簽欠落。「醴泉亭」（朱長方）、「狩野博士集書」（朱長方）の印記。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉　古義堂文庫　伊藤東涯書入本

和大二冊（一七五―一）

縹色表紙（二七・五×一九・四糎）、原題簽完存。一部に朱引・朱句点、上層等余白に「胤按」と標記せる伊藤東涯の評説等の書入れがある。「長胤／之印」（朱白交方）の印記。伊藤東涯（名は長胤、寛文十年〈一六七〇〉生、元文元年〈一七三六〉没）手沢旧蔵書。昭和二十九年九月三十日天理図書館受入。

〈京都大学文学部蔵〉　和大合一冊（中哲文C^{Na}6―8）

後補赤紫色空押唐草卍繋ぎ表紙（二六・六×一八・九糎）、書題簽「老子鬳齋口義　全」と題す。一部に朱筆で句点、訓点訂正、字義句釈等の書入れがある。

〈小浜市立図書館蔵〉　酒井家文庫　和大二冊

褐色表紙（二六・九×一九・六糎）、原題簽遺存。

〈新潟大学附属図書館蔵〉　和大二冊（子―14―0―4）

未見。高橋智氏調査に拠る。

縹色表紙（二七・七×一九・〇糎）、原題簽遺存、一部傷損。「新潟縣／高田師／範学校／図書印」、「新潟／第二師／範学校」、「藤□／□兼」（白文）の印記。

〈早稲田大学大学史資料センター蔵〉　津田文庫

和大二冊（文庫一―一五六八）

薄縹色表紙（二七・八×一九・二糎）、坤冊元題簽は剥落して冊中に遺存、乾冊は殆ど傷損し「經」字部分のみ僅かに残存。眉上行間余白に墨筆の字義句釈、イ本との校異、『老子翼』「孫鑛」等諸家注説、「禮記」「書集傳」「公羊傳」「史記列傳」「家語」「維摩經」「列子注」「列仙傳」等諸書引証等の書入れが多く、和文注釈、按語を交える。巻下には朱の句点・圏点、希に合点が施され、処々胡粉で訓点が訂正されている。「□川氏／永玩記」（朱長方、朱斜線二本で抹消）、「つだ文庫」（朱長方）、「早稲田大学／図書館蔵書」（朱長方）の印記。歴史学者津田左右吉（岐阜県生、明治六年〈一八七三〉生、昭和三十六年〈一九六一〉没）旧蔵書。昭和三十七年七月津田常子寄贈本。

〈早稲田大学中央図書館蔵〉　和大二冊（ロ一三―一三〇八七）

後補黄茶色表紙（二七・〇×一九・一糎）、書題簽「首書　老子　乾（坤）」と題す。朱の句点・朱引、またインクで圏点が施され、首二十章の行間字傍には希に朱墨で字義和訓等の書入れがある。「奥村／文庫」（朱方）、「早稲田／大學／圖書」（朱方）の印記。他に白文長方印一顆あるも墨消さる。明治大正期の政治家島田三郎（嘉永五年〈一八五二〉生、大正十二年〈一九二三〉没）旧蔵、大正十三年二月島田孝一寄贈本。

〈三原市立図書館蔵〉　貢山文庫　　和大二冊

縹色表紙（二七・二×一九・八糎）、原題簽欠失。朱引・朱句点・圏点が施され、行間に墨筆（少しく朱筆を交える）で和文の注説書入れがある。但、第二十一章以降は殆ど朱筆のみで書入れは少ない。「岡邨／順印」（白方）、「岡邨」（朱小長方）の印記。他に白文方形印一顆有るも印文不明。

〈新潟県立図書館蔵〉　和大二冊（子XIV三〇二五一）

未見。高橋智氏調査に拠る。

後補茶色表紙、「老子鬳（ママ）齋口義上（下）」と墨書。「□／華」（朱方）の印記あり。

〈祐徳稲荷神社蔵〉　和大合一冊（五九六）

縹色表紙（二七・六×一九・四糎）、原題簽破損。朱圏点、行間に朱墨の評注校語等の書入れあり。「谷口／中秋」（朱方）、「藍田／書院／蔵書」（朱方）、「西肥／木俊」（墨方）、「鹿洞／蔵書」（朱方）、「祐徳／文庫」（朱方、双郭）の印記。谷口藍田（文政五年〈一八二二〉生、明治三十五年〈一九〇二〉没）、鹿洞（大正三年〈一九一四〉没）旧蔵書。藍田は肥前有田出身の儒学者で名は中秋。広瀬淡窓の門人で咸宜園の出。明治二十九年に藍田書院を建立し開講する。鹿洞は諱は豊、藍田の五男。

〈大阪大学附属図書館蔵〉　岡田文庫　　和大二冊

同版種の取合わせ本。縹色表紙（二六・七×一九・三糎）、書題簽「老子経註入　上（下）」と題書。上冊には部分的に朱筆の句点・振仮名、字句訓義の書入れ、下冊には墨筆で字義句釈等の書入れが甚だ多い。上冊末葉表上眉に「明治廿九年八月十二日於／盛岡紺屋町書店求之／東安山人」の墨筆購得識語を認める。下冊後見返しには「關原季高」と、後表紙に「關原立淵」と墨署さる。「吾不□／甘句」（朱長円、上冊のみ）、「關／原」（朱方、下冊のみ）、「善／□」（白長方、下冊のみ）、「河内／岡田／文庫」（朱方）、「大阪大／学図書／之印」（朱方）「大阪大学図書」（朱長方）の印記。岡田伊佐衛門旧蔵。

〈上越市立高田図書館蔵〉　修道館文庫　和大二冊（二〇―九四）

縹色表紙（二七・二×一九・二糎）、原題簽遺存、右肩に「修道館文庫」の書票を貼付。まれに朱筆で訓点訂正、合点・朱引、行間に字訓の書入れ。両冊末葉裏に「正州魯官（花押）」と墨署あり。「正／州」（墨鼎形）・「魯／官」（墨内円外方）、以上連印。「山家／圖籍」（朱長方）、「中根善次郎長方蔵」（朱長方）、「高田」（朱方、向龍紋）、「脩道／館印」（朱方）の印記がある。

〈京都府立総合資料館蔵〉　和大二冊（和一二四・二二―R四五）

香色艶出し表紙（二七・一×一八・六糎）、原題簽傷損。首書に朱筆で訓点訂正、合点・朱引等の書入れあり。また経文には鉛筆による字訓等の書き込みが多い。「青易／山人」（白方）、「佐伯／大印」（朱方）、「京都府立／総合資料／館藏書印」（横書、朱方）、「寄贈／　小林市太郎様／平成三年二月十四日」（朱長方）の印記。

同

民国五九（一九七〇）刊（台北　藝文印書館）影印延寶二年京上村次郎右衛門刊本　無求備齋老子集成續編所収　　唐中二冊

外題は「徳倉昌堅増補首書老子經」と表紙に直接印刷。「平山正直／藏書之印」（長方）の底本の印影を残す。

又

寶永六（一七〇九）修（大坂　寶文堂大野木市兵衛）

題簽改刻され「増補首書　老子經　上（下）」と題さる。

尾の徳倉昌堅跋語末二行と刊記「來云延寶二年甲寅秋七月徳倉昌堅／書於洛陽駝坊／二條通玉屋町上村次郎右衛門重刊」を入木改修。「來云延寶二年甲寅秋七月徳倉昌堅」の一行は原板と同文であるが、次の二行に以下の刊記を刻入する。

寶永六己丑歳五月吉日
大坂心齋橋筋安堂寺町秋田屋
書林寶文堂大野木市兵衛刊行

『増益書籍目録大全』元禄九年刊本、同寶永六年増修本、正徳五年修本に収載の「老子經口義増補首書」は即ち本版で、版元名は元禄九年刊本では「上村次」とあり、寶永六年増修本、正徳五年修本では「秋一」に代わっている。「秋一」は秋田屋市兵衛（大野木氏）の略符であろう。蔵版者の変更が書林出版目録にも間違いなく反映されており、寶永六年に版木は京の上村から大坂の秋田屋に移ったことが確認される。

〈筑波大学附属図書館蔵〉　和大二冊（ロ八八四―二〇七）

茶褐色表紙（二六・八×一九・一糎）、新補書題簽「老子林註　上（下）」と墨書。「藏書印／和書〈外縁に「東京教育大学／附属図書館」〉」（朱横長双円）の印記。

〈東京大学総合図書館蔵〉　南葵文庫　　和大二冊合一冊（B六〇―一七七八）

縹色表紙（二六・二×一八・六糎）、上冊のみ原題簽を存す。「嶋田氏雙／桂楼収藏」（朱長方）、「南葵／文庫」（朱方）、「東京帝／国大学／図書印」（朱方）の印記。島田篁村（天保九年〈一八三八〉生、明治三十一年〈一八九八〉没）旧蔵。

〈斯道文庫蔵〉　和大二冊（一二六―ト二七）

後補香色表紙（二六・七×一八・九糎）、書題簽「老子講義全」と題す。経文の行間字傍に墨筆で句義語釈、校異等の書入れが多い。また胡粉を用い処々訓点が訂正されている。見返しに月冷舎文庫の書票を貼付。「月冷蔵／書之印」（朱長方）、「慶應義塾大學／斯道文庫藏書」（朱長方）の印記あり。

〈京都府立総合資料館蔵〉　和大二冊（〔和一二四・一二―R四五）

茶色表紙（二六・七×一九・〇糎）、原題簽傷損。行間、希に字義等の墨筆書入れあり。「京都府立／総合資料／館藏書印」（横書、朱方）、「京都府立総合資料館」（墨長方）、「寄贈／古久保末雄殿／昭和四十六年三月二十五日」（墨長方）の印記。

〈京都府立総合資料館蔵〉　和大二冊（和一七二―三）

新補黒色表紙（二六・四×一九・〇糎）、「京都府／図書館」と空押し。書題簽「老子經口義　上（下）」。「寶輪館」（朱長方）、「京都府／図書印」（朱方）、「京都府／図書館」（朱方）の印記。他に龍紋飾り枠の朱長方印、朱で塗抹され印文は不明。

又　（題簽「訂正鼇頭老子經」）

後印（大坂　寶文堂大野木市兵衛）

題簽「訂正鼇頭老子經　乾（坤）」と改刻さる。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉　和大二冊（一二六・一―六三②）

茶色表紙（二六・八×一九・一糎）、原題簽完存。朱筆の返点・縦点・送仮名・振仮名・濁点、また訓点が訂正され、まれに「イ」「河上」「無垢子」との校異等の書入れが見られる。「天理図／書館蔵」（朱長方）の印記あり。昭和三十年三月一日天理図書館受入。

〈東京大学総合図書館蔵〉　永峯文庫

和大二冊合一冊（B六〇―三六三九）

洋装仕立覆表紙（二七・七×一九・七糎）、原表紙は茶色（二七・六×一九・七糎）、原題簽遺存。朱の校字、まれに行間に句釈等の書入れが見られ、第二十章までに朱句点が施されている。「正利」（朱長方）、「東京帝／国大学／図書印」（朱方）の印記。昭和三年永峰春樹寄贈本。

〈建仁寺両足院蔵〉　和大二冊（百六十八番箱）

茶色表紙（二六・九×一九・一糎）、原題簽を存す。墨筆で振り仮名の書入れあり。乾冊は所在不明につき未調査。

又　遁修（江戸　須原屋茂兵衛）

刊記の一部を入木改修。即ち、

月吉日
大坂心齋橋筋安堂寺町秋田屋
書林寶文堂大野木市兵衛刊行

を削除し、

寶永六己丑歳五月吉日
日本橋通壹町目
書林　須原屋茂兵衛版

と改める。「寶永六己丑歳五」の七字は原刻の侭である。

此の刊記が真を伝えていないことは明らかであろう。しかし、版木が大坂秋田屋から江戸須原屋茂兵衛に移行したことを示している。移行の時期は詳らかではないが、上記の如く『増益書籍目録大全』正徳五年（一七一五）修本収載同書の版元記載は依然「秋一」とあるから正徳五年以後と考えられる。

〈大東文化大学図書館蔵〉　高島蔵書　　和大二冊（T三四四）

浅葱色布目表紙（二六・八×一八・七糎）、坤冊の元題簽遺存。乾冊分欠失。「石田」（朱小円）、「高島蔵書」（朱長方）、「大東文／化大学／図書館」（朱方）の印記。高島菊次郎旧蔵書。

〈京都大学附属図書館蔵〉　　和大二冊（一―六七　ロ一三）

縹色表紙（二七・一×一九・二糎）、元題簽遺存。朱句点書入れがある。一部青筆を交える。「故六止齋金原安修記念金原清左衛門寄贈」（緑長方）、「京都／帝国大学／図書之印」（朱方）の印記あり。

金原安修旧蔵書。

〈新潟大学附属図書館蔵〉　　和大二冊（子―14―0―5）

未見。高橋智氏調査に拠る。

縹色表紙（二六・五×一九・〇糎）、「老子　上（下）」と墨書。「仙台任天堂書店」（緑）の印記。

〈大東文化大学図書館蔵〉　　和大二冊（KB一〇六九）

縹色布目表紙（二六・四×一八・九糎）、坤冊元題簽遺存、乾冊分は欠失。主として経文部分の行間余白に朱細字の字義和訓訳解の書入れが周密。下巻では書入れ箇所はまばらとなるが鉛筆も使用され部分的にはより詳細である。また老子経文を章毎にガリ版で印刷した藁半紙が畳み込まれ、その裏面にペン書き細字で語釈等のメモが遺されている。近代学者の講義ノートであろう。「渡部／文庫」（朱方）、「京都文／求書堂／發兌記」（朱長方）、「大東文化／大學圖／書館印」（朱方）の印記あり。

又

後印（大阪　河内屋卯助等）

坤冊後見返しに次の奥付がある。

江戸日本橋南壹丁目　須原屋茂兵衛
同浅草茅町二丁目　同伊八
同日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同中橋廣小路町　西宮彌兵衛

三　都

発行
書肆

同芝神明町　岡田屋嘉七
同下谷池端仲町　岡村庄助
同本銀町二丁目　永樂屋東四郎
同十軒店　英屋大助
京都三條通御幸町角　吉野屋仁兵衛
尾州名古屋本町通　菱屋藤兵衛
大阪心齋橋通北久太良町　河内屋喜兵衛
同仝通本町北エ入　同和助
仝通備後町南エ入　同卯助

河内屋卯助の出版活動は慶應以後とされており（『慶長以来書賈集覽』）、幕末も最末期の印行、或いは既に明治期の印本である可能性もあろう。

〈九州大学附属図書館中央図書館蔵〉　大二冊（一一三ロ―三六）

茶色覆表紙（二六・八×一九・二糎）、坤冊にのみ書題簽を添え、題書程式は原題簽に倣う。巻上の末葉欠。「西田蔵書」（朱長方）、「九州帝国大学図書印」（朱長方、双郭）の印記。

又

〔明治〕印（京　文求堂田中治兵衛）

後表紙見返しに次の奥付がある。

和漢洋書籍賣捌所
京都寺町四条北入町
文求堂　田中治兵衛

〈慶應義塾図書館蔵〉　和大二冊（一一四―二九）

縹色布目表紙（二六・四×一九・〇糎）、原題簽遺存。巻上に朱句点・圏点、朱引の書入れがある。「中井龍子／寄贈書籍」（朱方）、「慶應義塾／図書館／蔵書之印」（朱方）の印記。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉　和大二冊（一二六・一―七②）

縹色布目表紙（二六・五×一九・〇糎）、原題簽完存。表に「増補首書」「老子經」（子持ち枠で囲む）と印刷せる書袋を遺存する。此の題字は本版早印上村次郎右衛門印行本の坤冊の題簽と同版、但、題下の「坤」字は削られている。朱筆で句点・圏点、朱引の書入れがある。「廣池／蔵書」（墨方）、「天理／図書／館印」（朱方）の印記あり。廣池千九郎（慶応二年〈一八六六〉生、昭和十三年〈一九三八〉没）旧蔵書。昭和三年四月一日天理図書館受入。

〈天理大学附属天理図書館蔵〉　和大二冊（一二六・一―六三）

縹色亀甲菊花紋表紙（二六・九×一九・〇糎）、原題簽完存。各冊後表紙に「明治十七年三月求之／　兵藤蔵」の墨識語がある。「英四郎」（朱長方）、「天理図／書館蔵」（朱長方）の印記。昭和三十年三月一日天理図書館受入。

〈東京大学総合図書館蔵〉　鴎外文庫

和大二冊（B六〇―三六四〇）

縹色空押卍繋ぎ瑞雲紋表紙（二六・五×一九・一糎）、原題

簽遺存。「鴎外／蔵書」（朱方）、「東京帝／国大学／図書印」（朱方）の印記。文豪森鴎外（文久二年〈一八六二〉生、大正十一年〈一九二二〉没）の旧蔵書。大正十五年一月寄贈。

〈早稲田大学中央図書館蔵〉　和大二冊（ロ一三―一二一七）

縹色布目表紙（二六・四×一九・〇糎）、原題簽遺存。経文に朱の句点、希に圏点が施さる。「早稲田／大學／圖書」（朱方）の印記。信夫恕軒（天保六年〈一八三五〉生、明治四十三年〈一九一〇〉没）旧蔵、大正三年四月信夫淳平寄贈本。

又

〔明治〕修（京　田中治兵衛）

徳倉昌堅跋文末の須原屋茂兵衛の刊記を削去し、その跡に次の如く入木する。奥付は無い。

京都寺町通四條北
田中治兵衛

〈筑波大学附属図書館蔵〉林文庫　和大二冊（ロ八八四―一三）

縹色布目表紙（二六・三×一九・〇糎）、原題簽完存。「北總林氏蔵」（朱長方）、「林文庫」（朱長方）、「東京高等／師範学校／図書之印」（朱方）の印記。漢学者林泰輔（安政一年〈一八五四〉生、大正十一年〈一九二二〉没）旧蔵書。大正十一年十二月二十三日林直敬寄贈本。

〈東京大学総合図書館蔵〉　和大二冊合一冊（B六〇―八〇）

縹色布目表紙（二六・一×一八・七糎）、原題簽遺存。「東京帝／国大学／図書印」（朱方）の印記。

〈大阪大学附属図書館蔵〉懐徳堂文庫　和大二冊

縹色空押卍繋ぎ雲龍紋表紙（二六・〇×一九・二糎）、原題簽を存する。一部に朱の圏点、校語、語釈等の書入れがある。坤冊後見返しに次の墨識語を認める。

庚戌七月念八衣洲讀於保陽氷壺軒楊柳深處

庚戌は明治四十三年。「尾崎／重平」（朱小円）、「大阪大／学図書／之印」（朱方）の印記。乾冊表紙に「愛田兼達氏／寄託本」の小長方印を捺した小紙片が貼付さる。昭和二十六年九月十日同館受入図書。

〈東北大学附属図書館蔵〉　和大二冊（教養一二六―一三八）

縹色布目表紙（二七・一×一九・二糎）、原題簽存。「粟野／蔵書」（朱方）の印記あり。

〈大東文化大学図書館蔵〉白木蔵書　和大二冊（KA二四九）

縹色布目表紙（二六・一×一八・九糎）、元題簽遺存。一部に朱圏点・朱引書入れあり。「名何／郷人」（白豆形）、「□／社」（朱方）、「戸川蔵／書之記」（朱長方）、「白木蔵書」（墨長方）、

「大東文化／大學圖／書館印」（朱方）の印記。白木豊旧蔵書。

又

（題簽「鼇頭註釋林註老子道德經」）
明治遁修（東京　松山堂藤井利八）

跋末の一行及び刊記を剜去。題簽改刻され「鼇頭註釋一林註老子道德經」と題し、また、見返しには

虞齋林希逸口義
鼇頭註釋一林註老子道德經
東京　松山堂藏版

と題さる。さらに、後表紙見返しの奥付には、初行に「和漢図書出版発行所」の一行を枠で囲み、その横の囲み内に、発行兼印刷者として東京市京橋區南傳馬町一丁目の藤井利八、発行所を同所在の松山堂書店と記す。

〈無窮会図書館蔵〉　平沼文庫　　和大二冊（平沼一〇三五〇）

縹色表紙（二六・八×一九・一糎）。原題簽遺存。見返しは朱色地。「無窮會／神習文庫」（朱長方）の印記。

又

後印（東京　松山堂藤井利八、松雲堂発行）

題簽題字は前掲本と同版であるが、下方に「上」「下」とある。或いはスタンプによる押捺か。見返しも前掲本と同版。奥付は程式殆ど同様であるが別版、発行兼印刷者の所在を「東京市外上駒込殿中二八」と更め、「藤井」の上に「松山堂」の三字を冠し、発行所を「松山堂出版部總代理店　松雲堂書店」とする。

〈筑波大学附属図書館蔵〉　　和大二冊（ロ八八四―二八九）

茶色表紙（二七・〇×一九・三糎）、題簽完存。見返しは紅色地雲母引。「蔵書印／和書〈外縁に「東京教育大学／附属図書館」〉」（横長双円）の印記。

〈京都府立総合資料館蔵〉　和大二冊（和一二四・二二―R四五）

茶色表紙（二六・九×一九・四糎）、題簽完存。行間、上層に字音、字義句解等の鉛筆による書入れあり。「京都府立総合資料館」（朱長方）、「寄贈／　岡村シヅ殿／昭和58年1月13日」（朱長方、姓名・数字はペン書き）の印記。

老子虞齋口義

二巻　宋林希逸撰　釋即非如一校
〔寛文〕刊

首に「太上老子像」（出関図）一葉（裏に「黄檗沙門如一和南題」の題詩計五行あり）、「老子虞齋口義序」（末題「遠孫即非頭陀如一和南書於蓬萊方丈」）、「宋理宗皇帝宸翰」一葉（裏に「虞齋林公像」）及び「老子虞齋口義發題」（末に「虞齋林希逸識」と題す）を冠す。

本文巻頭は「老子鬳齋口義巻上」、次行低四格「閩福清竹溪居士林希逸肅翁解」、第三行低七格「遠孫沙門如一即非校刻」、第四行低二格「道可道章第一」と題す。尾題は「老子鬳齋口義上（下）終」と。

四周単辺（二一・七×一三・九糎）、有界、毎半葉十行行二十字、注改行低二格中字単行十八字。経文には句点・圏点を付し、要字を○で囲む。注文には句点のみ付刻。版心白口魚尾無し、中縫「老子鬳齋口義　巻上（下）（丁付）」と題す。

首の即非序に「予幼時披誦不置。自學佛後無復經目。不意於甲辰秋飛錫豊州。寓源太守之金粟園。重覩是書。不勝欣慰。但歳月久遠。版經幾翻。字至亥豕脱誤。且中間入一二語。不知何人増贅。與本文不相照合。甚戻當日作者之意。由是仍家傳舊本而刪之。遂捐鉢資付梓。用廣流通。」と。

即非如一、江戸前期に清より来日した禅僧（黄檗宗）。明萬暦四十四年（一六一六）五月十四日、福建省福州府福清県に生まれる。即非は字。俗姓は林氏で、希逸の裔孫にあたる。明崇禎十年（一六三七）、黄檗山の隠元隆琦について受戒、清順治十一年（一六五四）東渡した本師隠元の招請に従い、同十四年（日本明暦三年）二月十六日長崎に渡来し、聖寿山崇福寺の住持となる。寛文三年（一六六三）八月二十四日、宇治の黄檗山萬福寺の隠元に省覲、首座として教化を助けた。翌四年九月、帰国の途についたが、豊前小倉藩主小笠原忠真に迎えられ、金粟園に寓した。同五年、忠真、広寿山福聚寺を開創し、請ぜられて開山となる。同八年七月、長崎に向い崇福寺に帰山、千呆性佼に後席を譲り退隠し、同十一年五月二十日、世寿五十六を以て示寂した。林雪光氏「即非年譜」参照。但、本書の開版についての記載は見られない。

前引の即非序に拠って、本版は寛文四年秋以後、小倉在住の間に上梓されたものと考えられる。江戸時代書林出版書籍目録を繙けば、寛文五年から六年に刊行されたとみられる『和漢書籍目録』には載らず、寛文十年刊『増補書籍目録作者付大意』の「禅宗」部門に「二冊同（即非）老子経」と著録されるのを嚆矢とする。従って、本書の刊行年は寛文四年以後、同十年以前に限定される。その後も、寛文十一年刊『増補書籍目録』、〔延寶元年（一六七三）〕刊『増補書籍目録全』、〔同二年頃〕刊『増続書籍目録全』、同三年刊『新増書籍目録』、同年刊『古今書籍題林』、同本の貞享二年（一六八五）増修本『改正廣益書籍目録』、天和元年（一六八一）刊『書籍目録大全』、元禄五年（一六九二）刊『廣益書籍目

録』、同九年（一六九六）刊『廣益書籍目録大全』、同十一年増修本、同十二年刊『新版増補書籍目録』及び元禄九年目の寶永三年（一七〇六）、同六年、正徳五年（一七一五）の増修本に著録されている（但、『増補書籍目録全』『増続書籍目録全』『新増書籍目録』は冊数を「一」としている、また、元禄九年刊『増益書籍目録大全』の寶永三年、同六年、正徳五年の増修本は「そ・佛書」と「ろ・儒書」の両所に重出）。その内『増益書籍目録大全』には「田原仁」の書林名と「四匁」との値段付が認められる（正徳五年修本は値段付けを削除）。以上の著録によって、同書が江戸時代前期から中期にかけて書林を通して流通し、遅くとも元禄九年以後には田原仁左衛門の蔵版書であったことが判明する。田原仁左衛門は江戸時代初期より享保年間にかけて禅籍・儒書を扱った京の書肆。享保以後の書版の動向存否は未詳。伝本は極めて少なく僅かに次の四本が知られるが、いずれも刊記奥付は無く、書林名を遺す本は管見に入らない。

〈龍谷大学大宮図書館〉　和大二冊（三二六・一―三七W）

寫字臺文庫。香色空押七宝蜻蛉紋表紙（二七・二×一九・九糎）、原印刷題簽、第一冊のみ遺存「老子鬳齋口義」（隷書体）と題す。「寫字臺之藏書」（朱長方）の印記あり。

〈慶應義塾図書館蔵〉　和大一冊（一七五―三八七）

縹色表紙（二六・八×一七・四糎）、書題簽「老子林□　全」（「中央左側部破損し、「注」「註」何れか不明）。後見返しに「信陽中嶋／　堀貞齋」と墨識がある。「慶應義塾図書館蔵」（朱長方）の印記。

〈新潟県立図書館蔵〉　和大二冊（子XW三〇二五〇）

未見。高橋智氏調査に拠る。

茶色表紙（二六・六×一八・〇糎）、刷題簽（子持枠）「老子鬳齋口義」と題す。「洲尾堂図書」（朱長方）、「竹□（？）／珍玩」（朱方）、「竹田／主人」（白方）、「四五□／□弐三五（？）／巻（？）書」（朱方）の印記あり。

〈静嘉堂文庫蔵〉　陸氏十萬巻楼本　和大一冊（一三―二三）

淡茶色表紙（二七・二×一八・〇糎）、外題無し。「老子鬳齋口義序」、「宋理宗皇帝宸翰」及び「老子鬳齋口義發題」を末に誤綴。下巻尾題後に「密印西隠堂蘭桂齋／　摩逸子煌識」と墨識あり。「歸安陸／樹聲蔵／書之記」（朱方）の印記あり。陸心源十萬巻楼旧蔵。本帙が陸氏所蔵となった経緯については明らかでない。尚、『静嘉堂秘籍志』巻三十道家類著録の「老子鬳齋口義　刊一本」とはこの本を指すようであるが、『皕宋樓藏

書志』巻六十六著録の「老子口義二巻　明萬暦刊本」に当てている。失考であろう。

同

民国五四（一九六五）刊（台北　藝文印書館）影印〔寛文〕刊本　無求備齋老子集成初編所収

唐中一冊

首の「太上老子像」（出関図）・「黄檗沙門如一和南題」題詩一葉の次に、「莊子像」（表）・「福清林希逸像」（裏）の一葉（版心題「莊子鬳齋口義　像」、丁付け「二」）及び「太上老君像」（表）・「明太祖皇帝御製老君賛」（裏）の一葉（版心題「老子鬳齋口義　圖讃」、丁付け「乙」）の計二葉がある。管見の掲出原刻四本の何れにも此の二葉は無く、特に「莊子像」の一葉は本書との関連は薄く、影印時の妄補ではないかと疑われる。影印の底本である嚴霊峰氏所蔵本に間違いなく此の二葉が存するのであれば、掲出の四本か、嚴氏所蔵本の何れかを修本としなければならない。

扉裏の木記に「拠日本寛文四年刊本景印」とあるが、寛文四年の刊記を有する伝本は未だ管見に入らない。即非序に「不意於甲辰秋飛錫豊州。寓源太守之金粟園。重覩是書。」と言う「甲辰」が寛文四年に相当し、それを刊年に当てたものと思われるが、この年は即非が帰国の途に付き、小倉藩金粟園に滞留を始めた年であり、その年の内に開版に及ぶ暇があったかどうか疑わしい。但、底本は初印に近い早印本である。

以上、『老子鬳齋口義』の諸版と、諸所に現存する各版伝本について、知見の及ぶところを報告した次第である。序言でも述べたように、博捜を心掛けはしたものの、所在が分かっているにもかかわらず未調査のままの伝本も数多く、更に補充調査の必要性を感じている。しかしながら、この段階で先ず各版の系統関係と管見諸伝本の帰趨について、概要を報告しておくこともあながち意味のないことでは無いと考える。

此の報告は、研究所斯道文庫が研究事業の柱として掲げる「漢籍総目録編纂」の為の書誌調査を遂行する中で、得られた成果の一端として公表するものであることを明記しておきたい。

調査に際しては、特に伝本所蔵者各位のご理解とご高配を忝くし、種々便宜を賜った。ご報告が大きく遅延したことをお詫び申し上げると共に、ご厚恩に対して深謝申し上げる。

参考文献

宮内廳書陵部編『圖書寮典籍解題　漢籍篇』（東京　編者　昭和三五〈一九六〇〉・三）

国立国会図書館参考書誌部編『国立国会図書館所蔵貴重書解題　第二巻』（東京　国立国会図書館　一九七〇）

國立國會圖書館圖書部編『國立國會圖書館所藏古活字版圖録』（東京　國立國會圖書館　平成一〈一九八九〉・一二）

東洋文庫日本研究委員会編『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅲ』（東京　東洋文庫　平成一二〈二〇〇〇〉・三）

内閣文庫編『改訂内閣文庫漢籍分類目録』（東京　編者　昭和四六〈一九七一〉・三）

大阪府立図書館編『大阪府立圖書館藏石崎文庫目録』（大阪府立図書館シリーズ第二十二號）（大阪　編者　昭和四三〈一九六八〉・三）

慶應義塾圖書館『慶應義塾圖書館藏和漢書善本解題』（東京　文祥堂　昭和三三〈一九五八〉・一二）

天理大学附属天理図書館編『天理図書館稀書目録　和漢書之部　第四』（天理図書館叢書第四十三輯）（天理　天理大学出版部　平成一〇〈一九九八〉・一〇）

河田熊編『静嘉堂秘籍志』五〇巻（〔東京〕　静嘉堂文庫　大正六―八〈一九一七―一九〉）

杏雨書屋編『新修恭仁山荘善本書影』（大阪　武田科学振興財団　昭和六〇〈一九八五〉・五）

反町茂雄編『弘文荘待賈古書目録　第十号』（東京　弘文荘　昭和一〇〈一九三五〉・一〇）

反町茂雄編『弘文荘古活字版目録』（『弘文荘待賈古書目録　第四十二号』）（東京　弘文荘　昭和四七〈一九七二〉・一）

反町茂雄編『弘文荘古版本目録』（『弘文荘待賈古書目　第四十五號』）（東京　弘文荘　昭和四九〈一九七四〉・一）

反町茂雄編『弘文荘善本目録』（『弘文荘待賈古書目　第五十號』）（東京　弘文荘　昭和五二〈一九七七〉・一）

北京圖書館編『北京圖書館古籍善本書目』（北京　書目文獻出版社　一九八七・七序）

北京大學圖書館編『北京大學圖書館古籍善本書目』（北京　北京大學出版社　一九九九・六）

常書智・李龍如等編『湖南省古籍善本書目』（長沙　岳麓書社　一九九八・六）

中國古籍善本書目編集委員會編『中國古籍善本書目　子部』（上海　上海古籍出版社　一九九六・一二）

國家圖書館特藏組編『國家圖書館善本書誌初稿　子部㈢』（台北　國家圖書館　民国八七〈一九九八〉・六）

『山氣文庫目録』（『韓國典籍綜合目録』第一輯）（ソウル　國學資料保存會　一九七四・六）

大韓民國國立中央圖書館編『國立中央圖書館古書目録3』（ソウル　大韓民國國立中央圖書館　一九七二・一二）

大韓民國國立中央圖書館編『國立中央圖書館善本解題Ⅰ』（ソウル　大韓民國國立中央圖書館　一九七〇・一二）

『誠庵文庫目録』（『韓國典籍綜合目録』第四輯）（ソウル　國學資料保存會　一九七五・九）

延世大學校中央圖書館〔編〕『古書目録』（ソウル　延世大學校中央圖書館　一九七七・五）

高麗大學校中央圖書館編『薪菴文庫漢籍目録』（高麗大学校蔵書目録第10輯）（ソウル）　高麗大学校出版部　一九七四・一）

〔韓國精神文化研究院〕資料調査室編『蔵書目録　古書篇一』（城南市　韓國精神文化研究院　一九九一・八）

ケネスB・ガードナー編『大英圖書館藏日本古版本目録』（London The British Library、天理　天理図書館　一九九三）

渋江全善・森立之『經籍訪古志』八巻（『解題叢書』東京　國書刊行會　大正五〈一九一六〉・一　所収）

川瀬一馬『増補古活字版之研究』上巻・中巻・下巻（図録篇）（東京　日本古書籍商協会　昭和四二（一九六七）・一二）
阿部隆一『中国訪書志』（東京　汲古書院　昭和五一（一九七六）・一一）
阿部隆一『増訂中国訪書志』（東京　汲古書院　昭和五八（一九八三）・三）
楊守敬編『留真譜二編』（書目五編所収）（台北　廣文書局　民国六一（一九七二）・七）　影印民国六年楊氏観海堂刊本
清銭曾撰　瞿鳳起編『虞山銭遵王蔵書目録彙編』（上海　古典文学出版社　一九五八・三）
清瞿鏞編『鐵琴銅剣樓蔵書目録』二四巻（書目叢編所収）（台北　廣文書局　民国五六（一九六七）・八）　影印清光緒二十四年瞿氏重刊本
清瞿啓甲・丁祖蔭編『鐵琴銅剣樓宋金元本書影』（書目四編所収）（台北　廣文書局　民国五九（一九七〇）・六）　影印民国十一年常熟瞿氏石印本
清丁丙編『善本書室蔵書志』四〇巻（書目叢編所収）（台北　廣文書局　民国五六（一九六七）・八）　影印清光緒二十七年丁氏刊本
清丁立中編『八千巻樓書目』二〇巻（書目四編所収）（台北　廣文書局　民国五九（一九七〇）・六）　影印民国十二年銭塘丁仁鉛印本
鄧邦述『羣碧樓善本書録』六巻（書目續編所収）（台北　廣文書局　民国五六（一九六七）・一二）　影印民國十八年江寧鄧氏刊本
莫伯驥『五十萬卷樓藏書目録初編』二二巻（書目叢編所収）（台北　廣文書局　民国五六（一九六七）・八）　影印民国二十年莫氏鉛印本
莫伯驥『五十萬卷樓羣書跋文』（國學集要二編所収）（台北　文海出版社　民国（五六（一九六七）））　影印民国三十七年刊鉛印本
李仁栄『清芬室書目』九巻序目一巻（ソウル特別市　寶蓮閣　一九六八）　影印自筆稿本
杜信孚等編『明代版刻綜録』（揚州　揚州古籍書店　一九八三・五）
明李杰撰　李楨等校『道藏目録詳註』四巻（中國哲學思想要籍叢編）（台北　廣文書局　民国六四（一九七五）・四）
陳國符『道藏源流考』（台北　明文書局　民国）　影印民国六四年（一九七五）台北古亭書屋印本
窪徳忠『道教史　世界宗教史叢書9』（東京　山川出版社　一九七七・八）
窪徳忠『道教入門』（東京　南斗書房　一九八三・一二）
窪徳忠『窪徳忠著作集7　道教と仏教』（東京　第一書房　一九九八・一二）
車柱環『朝鮮の道教』（京都　人文書院　一九九〇・六）
長澤規矩也編『和刻本諸子大成　第九輯』（東京　古典研究会　昭和五一（一九七六）・四、汲古書院発行）
三村清三郎著　肥田晧三・中野三敏編『三村竹清集二』（日本書誌学大系23（1））（武蔵村山　青裳堂書店　昭和五七（一九八二）・四）
国立公文書館内閣文庫編『増補改訂内閣文庫藏書印譜』（東京　国立公文書館　昭和五六（一九八一）・三）
宮内庁書陵部編『書陵部藏書印譜　下』（圖書寮叢刊）（東京　明治書院　平成九（一九九七）・三）
渡辺守邦・後藤憲二編『新編蔵書印譜』（日本書誌学大系79）（武蔵村山　青裳堂書店　平成一三（二〇〇一）・一）
国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印—国立国会図書館所蔵本から—』（東京　雄松堂　二〇〇二・一〇）
慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成一—三・索引』（斯道文庫書誌叢刊之一）（東京　井上書房　昭和三七—三九（一九六二—六四））
井上和雄『慶長以来書賈集覽』（東京　言論社　昭和五三（一九七八）・六）
井上隆明『増訂改訂近世書林板元總覽』（日本書誌学大系76）（武蔵村山　青裳堂書店　平成一〇（一九九八）・二）
岩井大慧編『東洋文庫十五年史』（東京　東洋文庫　昭和一四（一九三九）・一二）
早稲田大学図書館図書館史編集委員会編『早稲田大学図書館史—資料と写真でみる一〇〇年—』（東京　早稲田大学図書館　平成二年（一九九〇）・九）
寺田貞次『京都名家墳墓録附略傳並ニ碑文集覽』（京都　山本文華堂　大正一一

〈一九二二〉・一〇）
京都史蹟會編『羅山先生文集』（京都　平安考古學會　大正七年〈一九一八〉）
湯浅邦弘『懐徳堂事典』（吹田市　大阪大学出版会　二〇〇一・一二）
橋川時雄『中國文化界人物總鑑』（東京　名著普及会　昭和五七〈一九八二〉・三）
大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』（京都　思文閣出版　一九八八・一二）
鄭偉章『文献家通考』（北京　中華書局　一九九九・六）
范鳳書『中国私家藏書史』（鄭州　大象出版社　二〇〇一・七）
金子和正「古活字本の印刷技法について―慶長勅版を中心として―」（ビブリア第六七号　昭和五二〈一九七七〉・一〇）
荒木見吾「林希逸の立場」（『中国思想史の諸相』〈福岡　中国書店　一九八九・五〉第一篇宋代思想史の諸相所収）
池田知久「日本における林希逸『荘子鬳齋口義』の受容」（『二松学舎大学論集』第三十一号　昭和六三〈一九八八〉・三）
〔池田知久〕編『林希逸『三子鬳齋口義』と東アジア三国の近世文化』（東方学会第四十八回国際東方学者会議シンポジウムⅢ資料集）（東京　東方学会　二〇〇三・五）
崔在穆「林希逸『三子鬳齋口義』の韓國版本調査」（『東方学会第四十八回国際東方学者会議シンポジウムⅢ資料集　林希逸『三子鬳齋口義』と東アジア三国の近世文化』二〇〇三年五月　所収）
崔在穆「林希逸『三子鬳齋口義』の韓國版本調査」（科研費「古典学の再構築」講演会レジュメ、二〇〇〇年七月発表）
長尾直茂「林羅山の『老子鬳斎口義』校訂及び施注について」（『漢文學解釋與研究』第四輯　平成一三〈二〇〇一〉・一二）
長尾直茂「即非禅師の世系と林希逸―「老子口義序」と『福清縣志續略』をめぐって―」（『黄檗文華』　黄檗文化研究所　第一二一号　平成一四〈二〇〇二〉・六）
林雪光「即非年譜」（『神戸外大論叢』二一巻第三号　神戸市外国語大学　研究所　昭和四五年〈一九七〇〉・八）
山城喜憲「〔天理大学附属〕天理図書館蔵『老子道徳經河上公解〔抄〕』翻印並に解題（下）」（『斯道文庫論集』第三十一輯　平成九〈一九九七〉・一）
山城喜憲「神宮文庫蔵『〔老子經抄〕』解題編」（『斯道文庫論集』第三十三輯　平成一一〈一九九九〉・一二）